ハンス・ボーベクの生涯と地理学への貢献

森 川 洋*

Der Lebensweg von Prof. Hans Bobek und sein Beitrag zur Geographie

Hiroshi MORIKAWA*

Abstract

Nach A. Buttner (1983) war Hans Bobek (1903-1990) ein Geograph, der in diesem Jahrhundert als 'Renaissance Man' der Geographie weltweit hochgeschätzt wurde und den europäisch-amerikanischen Geographen durch seine Orientforschung u. a. die geographische Bedeutung der 'Judeo-Christian value biases' erkennbar machte. In der Tat hat Bobek in verschiedenen Bereichen unseres Faches bahnbrechende Beiträge geleistet, wie den Einbau der funktionalen Betrachtungsweise in die Geographie und später die Begründung der deutschen Sozialgeographie, Veröffentlichungen zu seiner Theorie des Rentenkapitalismus, Beiträge zur Geomorphologie, Herausgabe des Atlases der Republik Österreich u. a.

Es ist für Erforschung der Wissenschaftsgeschichte der Geographie sehr bedeutsam, die geographischen Beiträge eines solchen großen Geographen zu untersuchen. Dabei soll man seinen Lebensweg und darin den Lauf bzw. Entwicklungsprozeß seiner Gedanken und Studien berücksichtigen. Also zielt dieser Aufsatz darauf ab, durch seinen Lebensweg und die wichtigsten Arbeiten H. Bobeks Beitrag besonders zur Humangeographie klarzumachen.

Die Hauptergebnisse dieser Arbeit sind wie folgend:

1. Im Jahr 1926 hat er an der Universität Innsbruck als Dissertation die Stadtgeographie von Innsbruck geschrieben. Ihr Hauptteil wurde in den "Forschungen zur deutschen Landes- und Volkskunde" veröffentlicht, während der theoretische Teil ihrer 'Einleitung' zu Grundfragen der Stadtgeographie in der Zeitschrift 'Geographischer Anzeiger' herausgebracht wurde und nachhaltige Beachtung fand. Er hat sich aber 1935 an der naturwissenschaftlichen Fakultät der Universität Berlin mit einer Studie über die Inntalerrasse habilitiert, die ein völlig neues Bild vom Zerfall der Würmvergletscherung zeichnete. Sein Studienwechsel von der Stadtgeographie zur Geomorphologie erfolgte auf Drängen seines Doktorvaters, J. Sölch. Innerhalb der damaligen deutschen Geographen herrschte nämlich die allgemeine Meinung, daß man auf alle Fälle eine 'solide geomorphologische Grundlage' besitzen muß.

2. Im Jahr 1934, als er wissenschaftlicher Assistent an der Universität Berlin war, führte er seine erste Untersuchung in Iran durch. Seine Orientforschung hat sich schließlich zur Theorie des Rentenkapitalismus kristallisiert, die auch als ein bedeutender empirischer Beitrag seiner Sozialgeographie gilt. Obwohl er erst 1948 auch den weltbekannten Aufsatz über "Stellung und

* 広島大学文学部

* Philosophische Fakultät der Universität Hiroshima

Bedeutung der Sozialgeographie" geschrieben hat, wurde die sozialgeographische Betrachtungsweise bereits in der Innsbruck-Forschung bzw. spätestens in seinem Vortrag am Internationalen Geographentag Amsterdam 1937 als Keim bemerkt.

Seit den späten 50er Jahren hat er sich jedoch mit der Herausgabe des Atlases der Republik Österreich beschäftigen müssen. Da sie ihn mit höchster Arbeitsintensität mehr als zwanzig Jahre belastet hat, konnte er leider seine eigenen Arbeiten über Sozialgeographie und Orientforschung nicht mehr in gewünschtem Maße fortsetzen. Vielleicht hatte es zur Folge, daß er seine eigene sozialgeographische Schule nicht so wie W. Hartke entwickeln konnte; obwohl ein großer Teil seiner Schüler als promovierte Geographen bei Bund und Ländern tätig sind, gibt es wenige Geographen, die seine Sozialgeographie weiter entwickelt haben.

3. Auf Grund der stufenweisen Integration zur Landschaft hat er das logische System der Geographie aufgebaut. Dabei erhielt für ihn das neue Ganze einen größeren Inhalt als eine einfache Zusammenfassung der Elemente. Dieser Gedanke von ihm dominierte in der deutschen Geographie etwa 20 Jahre lang, aber am Kieler Geographentag 1969 wurde nicht nur Länder-, sondern auch Landschaftskunde als fiktive Ganzheit in starkem Maße kritisiert. Später, in seiner Abschiedsvorlesung der Universität Wien 1971, hat er den Pluralismus des wissenschaftstheoretischen Zuganges in der Geographie akzeptiert.

4. Der Atlas der Republik Österreich mit insgesamt 119 Karten, der unter der wissenschaftlichen und entwurfskartographischen Leitung von Hans Bobek zwischen 1960 und 1980 von der Österreichischen Akademie der Wissenschaften herausgeben wurde, ist in geographischer Hinsicht von tiefer Einsicht geprägt, übertrifft sogar die Atlanten von Großbritannien, Frankreich, U.S.-Amerika u.s.w. In diesem Atlas ist der Gedanke von der stufenweisen Integration zur Landschaft konkret verwirklicht; es scheint, daß das Kartenblatt XII/3, Regionsbildung durch Versorgungs- und Arbeitszentren, als eine das Kräftegefüge der Regionsbildung aufzeigende Karte besonders bedeutsam ist. Daher fand der Atlas nicht nur die übliche Verwendung, sondern gab auch eine wichtige Grundlage für alle raumordnerischen Fragen. Bobek hat mit seiner Hinwendung zur angewandten Geographie stark dazu beigetragen, daß sich seinen Schülern außer im Schuldienst auch neue Arbeitsmöglichkeiten in der Stadt- und Regionalplanung eröffnen.

5. Während seiner lebenslangen Forschung in der Humangeographie, die mit der Stadt Innsbruck begann, hat die Stadt-Land-Beziehung immer im Vordergrund gestanden. Bereits am Amsterdamer Internationalen Geographentag bemerkte er, daß sie in orientalischen Gebieten deutlich unterschiedlich von Europa und Nordamerika ist; deshalb behauptete er, daß der Anpassungsbereich der Christaller'schen Theorie nur auf solche hochentwickelte Länder begrenzt werden soll. In seiner Orientforschung berücksichtigte er den parasitären Charakter der orientalischen Städte und gelangte endlich zur Theorie des Rentenkapitalismus. In seiner Herausgabe des Atlases der Republik Österreich betonte er auch, wie oben erwähnt, daß zentrale Orte nicht nur als Versorgungs- und Arbeitszentren, sondern auch als Mobilitätszentren der Regionsbildung eine bedeutende Rolle spielen.

I. はしがき

オーストリアの世界的に著名な地理学者ハンス・ボーベクが亡くなったのを機に、彼の生涯と研究生活を尋ね、その研究業績やドイツ語圏における1920年代以後の地理学の動向にもできる限り注目しようとするのが本論の目的である。著名な学者の生涯を知るとは、その人の思想の流れを知ることにとどまらず、その研究業績を通じてその時代の斯学の研究動向全体をみることができる。シュティクルバウアーによると、「1950年代・1960年代のドイツ地理学の方法論的研究において最高の代弁者の一人」といわれる（Stiglbauer, 1983）が、処女論文の発表以来学界の注目を集め学界をリードしてきたボーベクの場合には、1920年代末以降のドイツ語圏の地理学史ないしは地理学思想史を知る上で最もふさわしい学者といえる。

筆者はこれまでボーベクの中心地研究や機能論、社会地理学、地理学本質論、さらには高利貸資本主義（Rentenkapitalismus）理論など、個々の業績については断片的に知ってはいたが、機能論から社会地理学にどのようにして到達したのか、ミュンヘン学派に対してボーベクの世界地理学はどのような特色をもつのか、ラントシャフト概念を中心としてドイツ語圏の地理学はどのように展開してきたのか、自然地理学的研究をどのようにして進めたのか、「一般地理学教科書」第5巻として執筆を予定され、ドイツ地理学界から大きな期待をもたれていた『一般社会・人口地理学』¹⁾はなぜ刊行されなかったのか、などについては不明な点が多かった。

本研究は、筆者が個人的にもお世話になったボーベク教授への追悼をかねて、これらの問題を明らかにし、地理学史の研究にも貢献することを意図したものである。

II. ボーベクの生涯と研究生活²⁾

ハンス・ボーベクは1903年5月17日に、オーストリア南部の都市クラゲンフルトに年齢の近い4人兄弟の末子として生まれた。父は東ボヘミアのブランドアイス・アム・アードラー（Brandeis

am Adler) の出身で、オーストリア帝国鉄道の重要部を占める南部鉄道会社（Südbahngesellschaft）の職員——後には同社幹部職員（Ober- u. Zentralinspektor）を勤めた——であった。母は当時のオーストリア領南シュタイアーマルクのマルブルク・アン・デア・ドラウ（Marburg a. d. Drau, 現スロヴェニア）の名門の出身で、詩や小説を書く教養ある女性であった³⁾。

ボーベクは少年の頃絵が好きで、すぐ上の次兄とともに学校の休みにはスケッチを楽しんだ。そのため、ギムナジウム卒業の時には美術学校への進学も考えたが、3兄弟の学費と家の新築のため家計に余裕はなく、父が許すはずもなかった。したがって、ボーベクは画家への道をあきらめ、地元のインスブルック大学に進学したが、景観を直観的に正確にとらえる才能は後年の地域調査において大いに役立つことになったという⁴⁾。

ボーベク少年にとって、もう一つの経験は家族に連れられてよく旅行したことであった。父は鉄道の家族優待券をもっていたので、毎年の夏を母の親戚で過ごすのが習慣であった。それは、6歳の時インスブルック市に移住してからも続いた。また時には、父の親戚やウィーンを訪ねたこともあり、少年時代において種々の地域やその人々と接する機会に恵まれた。特に両親とも言語混交地域の出身⁵⁾であり、親戚には宗派を異にする夫婦

(Mischehe) も多く、種々の言語の人たちとの交流のなかで、その生活を観察することは興味あることであった。また、精神的風土を異にするチロル地方に移住した経験や、そこでの観察も思考力を豊かなものにした。

ボーベクは国民学校や文科系コースのギムナジウムをインスブルックで過ごし、1921年にはその卒業試験 (Reifeprüfung) に優秀な成績で合格した。インスブルック大学では歴史学と地理学を専攻し、学内で可能な限りの社会科学を受講した。当時のインスブルック大学には、歴史学には5名の教官がいたが、地理学はジェルヒ (Sölch, J.) 教授だけであった。ジェルヒ教授は、ペンク (Penck, A.) の最後の弟子の一人で、長く中学校に勤めた後大学にきた人で、地形学や地誌を教えていた⁶⁾。

ボーベクは大学では熱心に研究する傍ら学生組合でも活躍し、一種の民族的な運動での活動のほかコーラス部にも加わった。それによって、インスブルック市の多くの人たちとも親交ができたばかりか、組合仲間との夏山登山や冬のスキー旅行を通じてアルプスの地形を知る機会にも恵まれた。

ボーベクは最初、歴史学で学位論文を提出しようと考えていた。そこで、当時高く評価していたシュタインアッカー (Steinacker, H.) 教授に相談したところ、「フランス 占領以前のエルザスにおけるハプスブルク領の展開」というテーマを与えられた。しかし、このテーマはすでにフランス人神父によって研究されていたことを知ったので、再びスタインアッカー教授に相談したが、なぜか別のテーマを指示されなかった。そこでやむなく、地理学のジェルヒ教授に近づいた。ジェルヒ教授は第1次大戦後とくに盛んであった「妥当国境 (natürliche Grenzen)」の問題を指示した。これについても種々検討した結果、政治境界の問題は結局のところ、その地域のもつ地理的特性よりも政治的な所与の条件や国家間の力関係によって決まるものと考えられた。そこで、以前から興味を抱いていたチロル地方の中心都市インスブルック (人口約5万) の研究をしたいと申し出、教授の同意をえることができた。

当時のドイツでは都市地理学は活発にはなっていたが、主にシュリューター (Schlüter, O.) の文化景観学 (Kulturlandschaftslehre) の影響下にあり、人文景観の一部としての都市の研究であった。人間とその行為に関心を抱いていたボーベクは、フランスの都市地理学研究者ブランシャール (Blanchard, R.) の著書『グルノーブル』 (Blanchard, 1912) やマックス・ウェーバー (Weber, M.) などの経済学を通じて、そうした研究の欠点をよく見抜いていた。古い地理学者がみたように、ボーベクにとっては、都市の存立を支える活動こそが重要な研究テーマであった。そこで考えたのは、分業社会では顧客に依存して交通の有利な地点に集積を強制される労働分野があること、そしてまたこの都市的中心点 (städtischer Mittelpunkt) に依存する地域が存在することであった。インスブルック研究の理論的な序論部分はこうした考えを述べたものである。それは、クリスタラーも認めている (Christaller, 1933, S. 12) ように、クリスタラーの中心地理論の中核部分を先取りすることになった。

この1926年提出の学位論文は1927年・28年とに分けて発表され⁷⁾、後述するように、大きな反響を呼んだ (Bobek, 1927, 1928)。1927年の「都市地理学の基本問題」が機能論的考察として重要なだけでなく、インスブルック研究のなかではすでに社会地理学的考察が早くも芽生えていた。したがって、当然のことながら、ボーベクはこの研究をさらに進めようと考えていたが、運命はそれを許さなかった。

ボーベクは歴史と地理で教員採用試験を受け、1927年秋からギムナジウムの教員試補として働いた後、やがて市内の高等実科学校 (Oberrealschule) の教員として採用され、学年度末まで勤めた。しかし、突然ジェルヒ教授からインスブルック大学地理学教室助手の話を持み込まれた。そのとき教授は、研究者の道を進むのであるならば地形学を研究するようにと強く説得した。これはボーベクの期待した激励ではなかったが、当時の——なおながらくの間——ドイツ地理学者の間では、「なにはともあれ、地理学の研究には手堅い

地形学的基礎をもたなければならない」というのが支配的な意見であった。

この熱心な説得は、当時のボーベクにとって特に受け入れ難いものであったわけではない。ジェルヒの後任として着任したメッツ (Metz, F.) 教授やその他の人たちからは都市地理学の研究を続けるために必要な何らの刺激をうることもなかったし、また他方では、彼はこれまでの多くの山歩きを通じて、山岳地形に興味をもっていたからである。それにしても、ジェルヒ教授の地形学の講義は受講していたが、これまで文系コースを辿ってきていきなり地形学に転向して、後述のように、地形学および自然地理学の分野で大きな業績をあげたことは、ボーベクの非凡な才能がうかがえる⁸⁾。

ボーベクは、ジェルヒ教授の説得の直後からアルプス地形の研究を開始した。それはまた、自然地理学にはあまり興味を示さなかったメッツ教授を助けることにもなった。翌年夏には、学生時代に一緒に登山をしたことのある有名なフィンスターヴァルダー (Finsterwalder, R.) 教授が、ドイツ・オーストリア・アルプス協会の地図作成のためにチラー川アルプス (Zillertaler Alpen) の写真測量 (photogrammetrische Vermessung) を始めたので、その助手を勤めた。これによって、この谷の地形をよく知っただけでなく、地形写真測量の技術も後に役立つことになった。

1929年 (26歳) には、学生時代からの知合いであった有能な英語教師ヘレーネ・プロコポヴィッチ (Helene Procopovici) と結婚した。彼女はルーマニアの父をもつハーフであった。彼女の父はグーツ所有者階級の出身で、当時のオーストリア領ロヴェレト (Rovereto, 現イタリア領トリエス地方の小都市) のポリティッシャー・ベチルク⁹⁾の官庁職員 (Bezirkshauptmannschaft) であったが、若くして亡くなっていた。1930年の夏には義父の郷里チェルノヴィツ (Czernovicz) 市やその周辺に住む多くの親戚を訪ねた。その時、このブコヴィーナ (Bukowina) 地方では知的上流階級や地主としてのルーマニア人やドイツ人、商人や中流階級としてのユダヤ人、農民としてのルテニ

ア人 (ウクライナ人の旧称) からなる階級社会を観察する機会をえた。ただし、このような種々の国籍の人の共同生活の様子や集落様式についての興味深い観察は、すでにハンガリーなどの旅でも観察していたことである。

1930/31年の冬にはまた、ボーベクはベルリン大学のクレプス (Krebs, N.) 教授の思いがけない訪問を受けた。それは、ベルリン大学地理学教室の助手になる気はないかという誘いであった。ボーベクにとってベルリンへの赴任は、恵まれた研究機会をうる代わりにインスブルックでの豊かな生活を失うことを意味した。当時ボーベクは両親の建てた立派な別荘に住んでおり、夫人や生まれたばかりの息子と長期間別居を強いられることになるので、夫人とよく相談してベルリン行きを決心した。

しかし、ベルリン大学では就任講演で大失敗をやり、その後長期間にわたってベルリンでは憂鬱な生活が続けることとなった¹⁰⁾。クレプス教授はボーベクを都市地理学者として招いたことも、彼の助手には地形学者が多いことも直接には話していなかったため、以前の研究成果よりもチラー川アルプスに関する現在の研究、なかでも地形の階層構造 (Stockwerkaufbau) を解明することによって河川や氷河作用の役割を明らかにしようとする内容の発表をした。それは、アルプス協会の測量による地層図に基づいて、谷の断面を体系的に正確に多くの図に示し調査方法の精緻化を意図したものであったが、鋭い批判を浴びることとなった。ベルリンではペンクの『氷河期のアルプス』 (Penck u. Brückner, 1901-1909) の立場がなお堅持されており、しかも驚いたことに、ペンク自身も出席して講演を聴いていた。それはまたクレプス教授の立場からすると、都市地理学者としてせっかく招いた助手が地形学を研究しようとするわけで、少なからず失望したようである。

「チラー川とチュクサー川アルプスの地形発達」の論文はインスブルック研究 (Bobek, 1928) と同様に、高名な『ドイツ地誌学・民族学研究 (Forschungen zur deutschen Landes- und Volkskunde)』 (Bobek, 1933)¹¹⁾ に掲載されたが、

彼が意図したように、それによって教授資格をうることはできなかった。当時そのほか用意していた地形研究のなかでは、イン川段丘の研究 (Bobek, 1935a) が最も重要なものであった。それは小論文ではあったが、溶解したヴェルム氷河の端の段丘に後氷期の地形変化を認め、ヴェルム氷河作用の崩壊について全く新しい見解を示したものであった。この論文は高名な地質学者アムプフェラー (Ampferer, O.) によって評価され (Bobek, 1930)、一般にも受け入れられた。これをペンクも認めたので、1935/36年にベルリン大学理学部で教授資格をうる (habilitiert) ことができた。しかし、ナチ政権下の当時においては「政治的に信頼できない」ものは講義できないことになっていたもので、実際の講義はできなかった。

この措置はきわめて不愉快なことであったが、ボーベクの研究生活にはまた大きな変化が現われた。それは中東地域に研究領域を広げることであり、それは同時にベルリンを去る動機ともなった。海外研究地域としてオリエントを選んだのは、オーストリア＝ハンガリー帝国の国土や国民が歴史の流れのなかで強い影響を受けた歴史発祥の地を研究してみたいという希望からであったかもしれないが、直観的に決めたことであった。オリエントのなかでも特にイランを選んだのは、地理学者の研究が少なかったことによる。しかも、ペルシャ語の優れた教師を見つけ、比較的短時間に日常会話ができるようになったという好運も加わった。

1934年にはプロイセン科学省の資金によって7カ月間イランに滞在した。1936年には2回目の補足旅行に出かけたが、山地で夜間の洪水に遭遇し、もちもの一切を失ったので2カ月に短縮して帰国した。1937年にも多くの学生たちとトルコ南東部山地の探検旅行を行ない、現在や氷河期の氷河作用についての問題を解明しようとした。またあわせて、人文地理や地誌的な研究も行なった。「イラン北西部における氷河の役割」 (Bobek, 1937) など3編がその成果である。

この期間における都市地理学への関心はいくぶん弱められてはいたが、失われたわけではなかった。クリスタラーの中心地理論 (Christaller,

1933) に関する研究の基本的意義を最初に評価したのもボーベクであった (Bobek, 1935b)。また、アムステルダム国際地理学会 (IGC) の発表では、クリスタラー的な中心地タイプが表われるのは西ヨーロッパや北アメリカの文明圏だけで、都市の機能的性格や周辺地域との関係はそれぞれのもつ社会構造に関係するとして、他の古い文化圏では別の都市類型が現われることを示した (Bobek, 1938)。

1937年末には、ナチ党の重要な地位にあったヘレーネ夫人の幼友達の助けによって——入党はしなかったが——講師職への障害が除去され、1939年には日給講師 (Diatendozent) に任命された。それによって、教室図書管理や種々の実習作業など助手としての仕事から解放され、多くの時間を研究に使用できるようになった。

しかしそれも束の間、1940年半ばには入隊が待っていた。短期間の訓練の後陸軍最高司令部の軍事地理部 (OKH-Mil-Geo) に配属され、中近東や後には北アフリカを軍事地理学的観点から研究するグループの指揮を任せられた。その3年の間に写真を用いて12カ国以上の地図を作成し、軍事用として印刷した。同時に、この間にはオリエントに関する地理学文献すべてをみることができ、余暇は自分の学問的研究のために利用できたので、アムステルダム大会の発表で示唆した発想を全オリエントについてより正確かつ総括的に検討した。集落の形成や経済における社会構造の基本的意義についても十分に理解することができた。その研究成果は『オリエントの社会地域 (Sozial-landschaften des Orients)』にまとめ、後の社会地理学で提唱した見解の基礎となったが、この原稿は残念ながら未刊に終わった。

1943年には連合軍はすでにイタリアに上陸したので、軍事地理グループの任務は終了することになった。ボーベクは自動車をもった軍事地理グループを前線に送り、できるだけ早く必要な情報を作成すべきであると上官に進言し、受け入れられたが、イタリアについて最も詳しい知識をもっていたにもかかわらず派遣されることはなかった。したがって、自分の意志で元の部隊に戻ることに

した。軍事地理グループでは軍政幹部 (Militär-beamter) としての大尉級の扱いを受けていたが、元の部隊では上等兵として測量部隊に入れられ、あげくのはては冬の北ロシア (リトアニア国境の少し東) の前線に送られた。その任務は、砲兵隊の撤退を誘導する道をつけるために大森林を測量することであった。これは40歳を迎えたボーベクにとって相当にこたえたようである。

しかし1944年5月にはまた、戦場の部隊情報の収集を目的として結成された特務研究中隊 (Forschungs staffel z. b. V.) に呼び出されることになった。このグループは、空中写真の利用に精通した地理学者、植物学者、土壌学者などによって構成され、ボーベクはその成果を地図に表現する仕事を担当した。この1年足らずの研究グループでの活動は学問的には大きな意味をもっていた。そこでは、植物学者エレンブルク (Ellenburg, H.) や植物地理学者シュミットヒューゼン (Schmithüsen, J.) との共同研究によって地理学的考察方法における生態学的研究の意義を初めて理解することができた¹²⁾。

この間ユーゴスラビアやイタリアさらにはプラハにも派遣されたが、最後には米軍の捕虜として大戦は終了した。ボーベクは中部ラインの収容所を転々とした後、1945年12月12日に解放された。しかし、終戦後のベルリンへ帰る気にはなれなかった。大学の席も失っていたし、破壊がひどく帰属も不明瞭なこの大都市には魅力を感じなかったからである。夫人と息子もベルリンを去り、夫人はボーデン湖畔のザレム (Salem, 寮制の男女共学の私立ギムナジウム) 分校に数カ月ではあったが英語を教える臨時教員の職を得ていたので、その小さなバラックで数カ月を過ごした。

しかしほどなく1946年5月には、フランス占領軍によって拒否されたメッツ教授の代理としてフライブルク大学地理学教室に迎えられた。教室は全く破壊され書物もなく急場しのぎの授業ではあったが、戦場や捕虜収容所から帰還し喜々として職業生活を準備する青年たちを相手に授業し、自分も学生たちも知らない地域に巡検するのは純粋な楽しみがあったという。この時期には書物や研

究資料の大部分を失っていたので、これまでの研究を続けることは不可能であった。また当時は、戦時中に考えた地生態学 (景観生態学) 的な問題に興味をもっていた。したがって、フライブルク地域で生態学的な研究をすすめる、『西南ドイツ研究』を発表した (Bobek, 1952)。そのほか、地理学的問題における社会構造の基本的意義という古くからあたためてきた発想が成熟したので、その最初の論文「社会地理学の立場と意義」を発表し (Bobek, 1948)、シュミットヒューゼンとの共同執筆により「地理学の理論体系における景観」を発表した (Bobek u. Schmithüsen, 1949)。さらに、ミュンヘンで戦後初めて開催された1948年のドイツ地理学会では、上記の未刊論文を要約して「近東地域を事例とした社会的空間形成」を発表した (Bobek, 1951a)。

しかしボーベクにとって、フライブルクでの生活は長くは続かなかった。1948年夏にはバーデン文部省¹³⁾とのトラブルのためのフライブルク大学をやめることになったからである。しかし幸いなことに、その後間もなくしてソ連占領地区 (旧東ドイツ) の2つの大学から招聘状を受け取った。その1つはハレ大学で、シュリューターの後任の席であった¹⁴⁾。そのほか、ウィーン世界貿易大学 (現ウィーン経済大学) から亡くなったディートリックス (Dietrichs, B.) の後任として招聘された¹⁵⁾。

1949年初頭ウィーン世界貿易大学に赴任したが、1951年5月にはハッシンガー (Hassinger, H.) の後任としてウィーン大学に移った。ハッシンガーは、残念ながら退官後程なく交通事故にあって急死した。ハッシンガーは晩年空間研究・空間整備 (Raumforschung und Raumordnung) に強く関わっていたので、後任のボーベクにはこれを引き受けるかどうか問題となった。これはボーベクにとって苦渋に満ちた選択であった。この仕事に関わることは、これまでの研究の続行に大きな支障を来すことになるが、この重要な社会的関心事へ発言することによって卒業生に就職の場を拡大するというメリットも考えられた。1954年にはオーストリア国土調査・国土計画振興協会

(Österreichische Gesellschaft zur Förderung von Landesforschung und Landesplanung) の創設に参加し、その委員会の研究代表者の1人となり、若干遅れてオーストリア科学アカデミーにも関与することになった。この研究作業はボーベクの眼を国内に向けさせ、リヒテンベルガー (Lichtenberger, E.) 助手の援助をえて、これまで知らなかったウィーンの影響圏について調査した。

ボーベクのウィーン大学での講義は、地理学の理論的基礎やそれに関連した問題に向けられ、種々々の地域の事例もって説明しようとするものであった。社会地理学の研究はインスブルック研究をはじめ戦争直前の数年間にすでに着手したもので、ドイツ地理学会ミュンヘン大会での発表 (Bobek, 1951a) やウィーン世界貿易大学教授就任講演として発表された「比較社会地理学の輪郭」 (Bobek, 1950) などを経て、最終的には「地理学的観点からみた社会経済発展の主要段階」 (Bobek, 1959) にまとめられた。この大論文は、彼の社会地理学の最も重要な成果と考えられるもので、多くの注目を引き、英語にも翻訳された。

この時期にはまた、イラン研究を続けることができた。1956年には新たな調査や研究資料の整理により、自然地理学的な論文を多く発表した。「天水耕作の分布」 (Bobek, 1951b)、「イランの自然林と樹木畑」 (Bobek, 1951c)、「先史・早期歴史時代におけるイランの気候と景観」 (Bobek, 1955) などがそれである。この最後の論文はエルブールス山脈の氷河作用に関するもので、イランの高山では、少なくとも最終氷期にはこれまで一般的に考えられていたような多雨期 (Pluvialzeit) ではなく、現在よりも乾燥した時期があったと結論した。その事実は、後に花粉分析によっても実証された。したがって、今日の森林後退や土壌荒廃の拡大現象は多雨期後の乾燥によるものではなく、数千年間の人間の収奪の結果であると考えた¹⁶⁾。

イランに関する研究が大きく進展したのは、1956年の調査と1958/59年のテヘラン大学客員教授時代にイラン石油取締役モストフィ (Mostofi, B.) 氏によって米軍空中写真の使用を許可された

ことにあった¹⁷⁾。この間イラン石油の2度にわたる長期の調査旅行にも参加した。これによって、種々の盆地が以前には今日ほど埋積されていなかったが、ルート (Lut) 砂漠南部では長期間の風食により今日では周辺山地から流入した河水が多数の小規模なカヴィール (Kavir, 雨水や地下水の供給を受けた鍋状地形) の形成に関与していることが判明した。

ボーベクはイラン研究¹⁸⁾についてなお多くの研究課題や興味をもっていたが、1950年代から始まった上記の国内研究のため思うようにできなかったのは残念なことであった¹⁹⁾。1961年には「古い文化をもつ低開発国の問題」 (Bobek, 1961) を雑誌に発表し、1962年には小冊子にまとめた (Bobek, 1962d)。これは現代的な問題指向的地誌学のモデルをなすものとして評価され (Schwarz, 1983)、版を重ねた。しかし、1960年代にはイラン研究の論文は急速に減少している。1976年にこれまで長くあためていた「主要耕地システムの発生と分布」 (Bobek, 1976/77) を発表したのが、この分野の主要論文の最後となった。

一方、国内の活動では、ハッシンガーによって再建された空間研究委員会 (Kommission für Raumforschung, 1946年) のもとで着手していたニーダーオーストリア・アトラスを、アルンベルガー (Arnberger, E.)²⁰⁾ と相談して全国に拡大することを決意した。当時各州ではそのような主題アトラスを使用して将来計画を策定していたが、州ごとに技術水準や方法は著しく異なっていた。空間整備は州の任務ではあるが、全国アトラスを編纂して各州の課題を比較可能にすることが必要であると考えられた。1961年には多人数の委員によって編纂された第1版が完成したが、成果が思わしくなく、結局その後の編集委員長はボーベク1人が引き受けることになった。そのため、全119葉の地図作成の著者を適当に割り当てるのがボーベクの主要任務となった。ボーベク自身は約50の地図作成を担当した²¹⁾。そのなかでは、彼が最初に研究した都市の中心地機能や建物構造が重点的に扱われた。

1959/60年にはヘルチュマノフスキ (Helczma-

novszki, H.) の支援のもとで「オーストリアの中心地」の作業を行なったが、いくつかの欠陥が現われたので、1970年代初頭にはヘスル (Fesl, M.) 助手と共同して新たな調査を行なった。アトラスの編纂が完全に終了したのは1980年であるが1977年にはほぼ完成を迎え、翌年には大著『オーストリアの中心地システム——実証的研究』をヘスルと共著で著した (Bobek u. Fesl, 1978)。この間1967年のドイツ地理学会では「工業時代における中心地理論」を発表した (Bobek, 1969)。一方、助手のリヒテンベルガーと共同で取り組んだウィーン市の建物構造に関する研究も大著として空間研究委員会報告書 (Schriften der Kommission für Raumforschung) 第1巻として刊行された (Bobek u. Lichtenberger, 1966)。

このほかにも重要とみられるアトラスには説明書をつける予定であったが、仕事の大幅な遅れによってその計画は著しく限定されたものとなった。ともかく、1人の指導者のもとで地理学の研究成果を駆使して全国アトラスが完成したのは世界的にも希なことである。ボーベクは1975年には、後述するように、『オーストリア地理学会報告』に長文の論文を載せている (Bobek, 1975)²²⁾。

ボーベクは1971年9月30日をもってウィーン大学を退官した。約500人の聴講者を前にした「地理学の発展——連続か断続か？」 (Bobek, 1972) と題する退官記念講演では、今日の地理学の問題点と将来発展すべき方向性を示したが、そのなかに新しい科学理論的な方法をも受け入れたのは注目すべきであるといわれる (Lichtenberger, 1990)。これより先、ボーベクの「自伝」には触れていないが、1969年のドイツ地理学会キール大会では、約20年間にわたってドイツ語圏地理学の基礎的な考え方として多大の影響を与えてきたボーベクのラントシャフト概念は批判され、ボーベクの自信を著しく傷つけることとなった。

1978年6月1日には旧西ドイツのルール大学地理学教室から、クリスタラーに次ぐ2人目の名誉博士号受賞者としてボーベクが選ばれた²³⁾。また、80歳の誕生日を記念して1983年10月27～28日には「人文地理学の新しい展望」と題するシンポジウ

ムが開催され、イギリス、スイス、スウェーデン、西ドイツ、合衆国の地理学者が報告した (Stiglbauer, 1984)。さらに、論文集『応用人文地理学論集』が多くの弟子たち²⁴⁾の論文を集めて刊行された。

しかしそれ以前の1976年12月には、47年間連れ添ったヘレーネ夫人を亡くしたのは痛恨事であったに違いない。それから1年半後に、愛弟子であり、長らくオーストリア共和国アトラスの共同研究者でもあったマリア・ヘスル (Maria Fesl) 博士と再婚した。マリア夫人は結婚後も空間研究委員会に勤めていたので、ボーベクのやり残していたいくつかの研究を夫人の手によって完成することができた。『オーストリア共和国アトラス』は当初予定していた5年間の完成が大幅に遅れ、1980年まで20年以上を要し、大学の退官よりはるかに遅れることとなった。

それが完成した4週間後の1980年8月にボーベクは心筋梗塞にかかり、その後活動は非常に制限されるようになった。しかし、なお残った力を振り絞ってバティマー (Buttimer, A.) の勧めによる「私の学究生活」 (Bobek, 1983) を執筆し、さらにそれに手を加え (Bobek, 1989)、マリア夫人とともに『オーストリアの中心地、II』を著した (Fesl u. Bobek, 1983)。そして80歳になったのを機会に、1983年10月には、1954年から30年間勤めた空間研究委員会委員長の職をリヒテンベルガー教授に譲った。その他13の研究委員会の職も退いた。心筋梗塞の影響により旅行活動は制限されていたが、オリエント世界のうちこれまで行きそびれていたエジプト旅行を1985年11～12月に実現した。

それから5年後の1990年2月15日に、87歳の誕生日を前にしてボーベクは亡くなった。翌1991年には、オーストリア地理学会名誉会長ならびに大学教授としての世界的な貢献を記念して、マリア夫人の手によって「ハンス・ボーベク賞」が設立された²⁵⁾。

III. 特に重要な学問的業績

以上のように、ボーベクの生涯は2度の大戦を

挟んで厳しい運命に揉まれ、研究生活は波乱に富むものであった。「自伝」に付けられた著書目録をみると、リヒテンベルガーが指摘するように、ボーベクはきわめて広い知識の持ち主であり²⁶⁾、しかも「列車をたびたび乗り換えた人」であった(Lichtenberger, 1990)ことが理解される。しかし、彼の生涯にわたる研究生活を通してみると、そこには一貫した脈絡があるように感じられる。

ボーベクの地理学理論に関する発言は、常に手堅い実証研究に裏付けられたものであり、単なる理論家ではなかった。人文地理学分野における実証研究の流れは、インスブルックの都市地理学研究から始まって、中央ヨーロッパとは異なった社会類型に属するオリエントの都市を考察し、ボーベク地理学の最重要成果の1つに数えられる高利貸資本主義理論の構築へとつながるのである。高利貸資本主義理論はヨーロッパとは異なった都鄙関係の考察によるものであり、彼の社会地理学はオリエント研究なしには十分な発展を遂げなかったであろう。バティマーが「ユダヤ教・キリスト教的価値感の偏向(Judeo-Christian value biases)の地理学的意義」を示した人と評したのはオリエント研究の成果に基づくものといえる(Buttimer, 1983, p. 167)。ボーベクの研究生活の後半の主要部分をなすオーストリア共和国アトラスの編纂においても中心地システムの研究は重視され、特に注目されるものとなった。

こうした人文地理学の研究過程のなかでは、アルプスからイランに至る地形学ないし自然地理学の研究はたしかに「迂回」ではあったが、それでさえ、彼の地理学への洞察に役立ち、人文地理学研究を深めることに貢献しているようにみえる。

ボーベク自身が「自伝」のなかでも述べているように、彼は常に地誌学的な研究よりも一般地理学の研究を指向した人であった(Bobek, 1989)。そして、数学的知識は乏しいとしながらも計量的方向を重視しており、以前から理論の構築を求めていたのは特記されるべきである²⁷⁾。特にオーストリア共和国アトラスの編纂においては、厳密な地域区分が要求され、否応なしに計量的手法に関心をもたざるをえなかったものとみられる。しか

し一方では、全体性・統合性を常に考慮しており、純粋な計量的分析家ではなかった。彼はまた地理学の研究方向にも常に深い関心を示し、地理学の方

方向付けにかかわってきた。バティマーが「20世紀の地理学者のなかで、ボーベク以上に『ルネッサンスの人(Renaissance Man)』と呼ぶにふさわしい人はない」(Buttimer, 1983, p. 167)といったのは、こうした意味においてであろう。

ところで、ボーベクの一連の研究を特色あるものに区切ってみると、その重点は、①機能論から社会地理学に至る地理学的アプローチの問題、②地理学体系論、③中心地研究、④オリエントを中心とした発展途上国研究、⑤オーストリア共和国アトラスの編纂、⑥氷河地形や気候学、生態学的研究を含めた自然地理学的研究、といった分野に広がるであろう。

このようにボーベクの研究は多岐にわたるので、その全分野について考察することは困難である。ここでは、人文地理学の研究分野に限定して①～⑥のテーマについて注目することにする。

1) 機能的研究方向

ボーベクは、少なくともドイツ語圏では初めて機能的研究方法を採用した人である。それは、具体的には都市地理学の分野において現われた。ボーベクによると、都市の理解にとっては、都市的生活(städtisches Leben)をその全体的な複雑な動態的な姿において捉えることが最重要課題であった(Bobek, 1927)。従来のドイツ地理学にみられたように、都市の位置から考察を始めて、単に形態的にだけ記述するのは彼にとっては無意味なことであった。他の学問では考察の対象とならない都市の平面形・立面形など外形的な考察はたしかに必要なではあるが、都市の実態は、その周辺地域との関係にかかわる機能を通じて初めて明確なものとなると考える。

このように、従来の研究とは異なった研究方法を導入したのは、その場所への集積を強制される真に都市的な職業分野(echt städtische Berufszweige)の存在を理解していたからであった(Hartke, 1963)。ボーベクは、都市を領域との経済的、文化的、政治的關係において支配的地位を

もつ集落であると定義する。その場合に、工業的生産活動は偶然的な都市的労働分野であり、工業集落は周辺地域との関係がない限りたとえ大きくても都市とはいえないとする²⁸⁾。

ボーベクは、中心地機能の階層的立地と影響圏については次のように説明している (Bobek, 1927)。「行政機関は小さい多数の行政中心から1つの大きな中心点へとピラミッド状に組織され、商業の場合にも、行政機関ほど規則的ではないにせよ、階層構造の存在が認められ、さらに文化的施設においても、広く分布する低次な施設から次第に高次な施設になるにつれて集中化するという同様な構造がみられる。」「都市の影響圏は1線によって画されるものではなく、ある都市の領域から他の都市の領域へと連続的に移行するものである²⁹⁾。その場合に、都市の影響は都市中心部からの距離の増大とともに減少し、影響圏の周辺部には初めは小さい局地的中心が現われ、次第に大きな局地的中心が現われるようになり、ついにはその都市圏は消えて完全に他の都市に属する領域へと移行する。しかもその際には、都市の交通的位置が良好なほど、都市への到達に要する費用が少なく、その都市のうる利益は大きくなる。都市の影響圏内における交通の集中度はその交通位置の重要性と密接に関係している。そのため、良好な交通位置にある都市の影響圏は近隣の交通に恵まれない都市の影響圏を犠牲にして拡大する。」

このような発想は中心地研究を大きく前進させ、クリスタラーの中心地理論に多大の影響を与えた。ボーベクの貢献を少し誇張していえば、クリスタラーはこのような記述的な説明を演繹的に深めて、六角形システムとして形を与えたものといえないこともない³⁰⁾。

ボーベクはこうした研究視角に基づいて、山間都市インスブルックをとりあげた。この論文 (学位論文) では、まず自然環境や都市発達史に触れた後、現在の都市については平面形、建物形態、人口などに言及しながらも、都市の経済生活に力点をおき、地方的な文化・行政の中心としての役割、アルプス越えの交通要点としての役割、その生活圏における中心としての役割について論究し

た (Bobek, 1928)。

この研究において特に注目されるのは、今日的な種々の資料を利用していることである。例えば、今日の人口流入圏だけでなく、戸籍簿によって14~16世紀の人口流入を調査したり³¹⁾、肉、牛・子牛、小家畜、バター、チーズ、木材、石炭などの移入圏や行政管轄圏を調査する一方、都市内部については、市街地の発展過程や建物分布だけでなく、居住 (人口) 密度や職場分布 (機能地域)、選挙における政党得票率分布、交通図などをあげて説明している。これらの資料は今日の都市地理学の研究においてはよく利用されるが、景観論はなやかなりし当時のドイツにおいてはまさに画期的なものであったといえる。特に市街地各地域の社会階層構成を示す手段として選挙得票率が利用され、すでに社会地理学への関心が示されている。

こうしたボーベクの研究には、デリエス (Dörries, 1930) やゲイスラー (Geisler, 1932) など景観地理学の研究者の間から多くの批判が現われたが、すでに紹介したのでここでは省略する (森川, 1974, pp. 7-9)。この論争を契機として、やがてドイツ地理学は機能論の時代を迎えることとなった。

1930年代後半におけるボーベクの研究は主として地形学に向けられていたが、1937年の国際地理学会アムステルダム大会では「機能的都市類型とその農村との関係」を発表した (Bobek, 1938)。それはまた、社会地理学研究に導く重要な発想を含むものでもあった。

この論文のなかではボーベクはまず、中心地的立地法則に従う個々の活動、職業およびそのすべての職業集団を中心地機能とは別に、中心地的活動、中心地的職業 (zentrale Berufe) または中心地的職業集団と命名した。これらは都市内部に集積して活動するが、周辺地域に対して中心地機能として働くとは限らないものである。ボーベクにとっては中心地自身よりも中心地的機能に従事する社会集団に関心があったからである³²⁾。また、純工業集落でも周辺に農村地域があれば中心地機能をもつようになり、多くの工業都市がこうして

発展してきたことを指摘する。中央ヨーロッパや西ヨーロッパの都市分布は中心地分布の上に工業都市が重合していることを分布図をもって示し、クリスタラーは工業化社会の実態を無視しているとした³³⁾。

この論文ではまた、前章で触れたように、西ヨーロッパや北アメリカとは異なった都市類型の存在を指摘している。地中海地域やオリエントでは、地主階級の都市支配が強く、彼らが都市の実権を握っている。したがって、商工業や自由業などは主として荘園領主のぜいたくな需要を満たすもので、これらの都市では豊かな都市的生活が発達しているが、背後地との関係は弱く、背後地の経済発展は遅れている³⁴⁾。このようなタイプの都市では、生活基盤の拡大は産業の発展ではなく政治的勢力の拡大によってのみ生ずるので、古代ギリシャのポリスは常に攻撃的性格をもっていたという。

かくして、この論文では都鄙関係からみた都市類型について考察し、社会類型論への発展の萌芽がみられる。クリスタラーが経済理論的な関心をもって理論・モデルの構築を進めたのに対して、ボーベクは現実の地域を説明する実証的研究への方向性を持ち、やがて社会地理学的方向へと進むこととなる³⁵⁾。したがって、ドイツ地理学における景観論から機能論への転換は論争を伴った革命的なものであったが、機能論から社会地理学への発展は、ともにボーベクの主導によって行なわれた自然のなりゆきであった³⁶⁾。

2) 社会地理学的アプローチ

ボーベクが研究を始めたとき、ドイツではヘットナー (Hettner, A.) やシュリューターの地理学の時代であり、これから社会地理学への道程は単純なものではなかった (Hartke, 1963)。シュリューターの文化景観学では、本質的には不可視的なものは除外され、またヘットナーによる地理学理論や地理学の位置づけに関する考え方は、社会的要因に関する地理学的知識の進展のなかで再考を要する状態になっていた³⁷⁾。

ボーベクの社会地理学に関する理論的な論文は、1948年の「社会地理学の立場と意義」(Bobek,

1948) や1962年の「社会地理学的アプローチの人文地理学への導入」「社会地理学は経済地理学に吸収されうるか?」(Bobek, 1962a, b) などである。しかし、その研究に関する発想はこの時期に始まったものではなく、上述したように、社会地理学的な見方はすでにインスブルック研究に始まり、国際地理学会アムステルダム大会の発表論文 (Bobek, 1938) や戦前から開始されたイラン研究において成長してきたものであった。そして、1959年に発表した「地理学的観点からみた社会経済発展の主要段階」(Bobek, 1959) がボーベクの実証的研究の中心をなすものといえる。

ウィーン世界貿易大学教授就任講演として発表された「比較社会地理学の輪郭」(Bobek, 1950)³⁸⁾ は上記の1959年論文 (Bobek, 1959) の基礎をなすものといわれるが、その冒頭には社会地理学に対する考え方が単純明快に示されている。すなわち、「地理学の研究対象を無生物界、生物界と人間界の3つに区分した場合に、人間界だけが個人的な自律性ないしは自律的な人間精神をもつため、そのままでは法則性を求めることが困難である。その場合に、人間界の理解には社会的法則性 (soziale Gesetzmäßigkeit) を求めるのが適当である。」オトレンバ (Otremba, 1951/52) らは、地上における人間にかかわるすべてを「どうしようもない個体」ないしは「なんら秩序の理解には到達しえない」ものとして捉えていたが、人間行動は社会集団のなかで規制されているので、それによって法則的な把握が可能となるとボーベクは考えていた (Hartke, 1963)³⁹⁾。

かくして、人間的なものの理解には、匿名の普遍的なものではなく、空間のなかで活動する人間集団 (menschliche Gruppe) が問題であることが認識されるようになった (Bobek, 1948)。ここで問題とする人間集団 (または社会集団) とは、特定の具体的な地域に密着した社会を構成する集団で、すべての人間集団ではない。地理学において有効な人間集団・社会集団とはヴィダルにおける生活様式集団 (Lebensformgruppe) であり、社会は生活様式集団に分解して考察するのが社会地理学の課題であると主張する⁴⁰⁾。そして、これ

ら種々の生活様式をもった社会集団はその相互作用によって複合社会 (komplexer Sozialkörper) を形成すると考える⁴¹⁾。

かくして、社会地理学にあつては、人間の価値判断から生ずる空間的行動が地域形成の要因と考えられ、従来の自然環境重視の地理学に比べて、きわめて人間中心的なものであつた。これまでとは違って、自然的要因は人間集団の価値判断に間接的にしか影響しない代わりに、社会学や社会心理学からの豊富な知識が導入された。

しかしながら、ドイツ社会学は抽象的でこうした研究には役立たなかつた。ボーベクの社会地理学でもハルトケの場合にも、フランス地理学の影響が強い。フランス地理学者はその膨大な地域研究のなかで社会的な内容を導入して成果をあげてきた。ボーベクは1948年の論文ではヴィダルの「人文地理学における生活様式」(Vidal de la Blache, 1911) を引用し、また戦時中における軍事地理部の作業においてもフランス文献をよく研究していた。それは、特にシリア地域についてであったが、フランスの地域研究にはドイツ以上に人間的要素が高く評価されていた (Hartke, 1963)。

さらに、「社会地理学のアプローチの人文地理学への導入」では次のように述べている (Bobek, 1962a)。「人文地理学の発展にとって重要な問題は、従来の地理学の専門領域構成における非常に形式的な見方からは解明されえない。われわれの研究対象の本質を解明しようとする場合に、地域の外形 (相観) や構造のほか、その背後にある現在または過去における力の構造 (Kräftegefüge) が解明されねばならない。その場合に、地域における人間活動の複雑な編目は、社会経済的集団でもって説きほぐしていくのが最善の道である」と⁴²⁾。社会地理学の地理学のなかでの位置づけについては、①従来の人文地理学=社会地理学、②人文地理学の1つの専門領域としての社会地理学、③人文地理学の新しい視角としての社会地理学などの種々の考え方があるが、ボーベクは第3の立場をとる (Bobek, 1957)。

しかし当時においては、地理的事象の説明のために社会的要因を過大評価すべきではないとする

人もあつた。オトレンバ (Otremba, 1962) は人間および人間集団の作用・行為から生じたすべての問題は、経済地理学の中で解決されるべきで、社会地理学は余分な存在であるとみる。「歴史的条件や文化空間的条件に基づく経済活動の差異は、一般普遍的な経済システムの単なる集約度の差異や密度差によって説明され、宗教や民族による経済観念の相違は全く問題にならない。また、経済地理学の研究では、その経済空間を形成した社会構造や社会的要因が考察の対象となっており、社会地理学などによる補足の必要はない。かかる状態のもとで社会地理学を独立させることは人文地理学の一体性を破壊する危険性もあり、またそもそも社会地理学という名称は不明瞭なものである」として社会地理学の存立に異を唱えた。

このような主張はボーベクにとっては捨ておき難いものであつた。彼はすぐさま「社会地理学は経済地理学に吸収されるか?」を発表し、そのなかでは、「若干の先進国社会では経済的要因を優先的に考えることができるとしても、特に発展途上国では歴史に根ざした社会的要素が大きく立ちほだかり、これを過小評価すべきではない。歴史的・文化的条件が不問にされるのはずっと遠い将来のことであり、現状でこれを排除するのは無理である」と反論した (Bobek, 1962b; 森川, 1972)^{43, 44)}。

ところで、今日のドイツ社会地理学ではハルトケ学派 (ミュンヘン学派) が有名である。ハルトケ学派はボーベクの社会地理学とは異なつたいくつかの特色をもっている。ボーベクが地方、国、文化圏のような具体的な複合的社会からなる——オリエントのような——地表の一部を広く研究対象として、歴史的な観点から社会的営力による地域構造を分析するのに対して、ハルトケ学派はせいぜい戦後の短い時代における小地域を対象として、代表的な指標 (指標法) を用いて文化景観に現われた1つの人間行動——例えば社会的休閒 (Sozialbrache)、植林、都市の大規模集団住宅——だけを対象とするところに特色がある。しかも、ボーベクのように、地理学の中での地位とか体系化について考えることなく、地域計画と関

係した研究を指向する。これに対して、ボーベクの社会地理学の考え方は学界に広く受け入れられたが、ボーベクの弟子で師の研究を大きく発展させた人はなく、学派というにはふさわしくない。リヒテンベルガーによると、ボーベクはハルトケ学派との分業を受け入れ、しかも彼はハルトケ学派の研究をその詳細について正確に知ろうともしなかったという (Lichtenberger, 1990)。

ボーベクは、上述したように、1959年には社会地理学の大きな成果にも数えられる「地理学的観点からみた社会経済発展の主要段階」を発表したが、1960年代になると、オーストリア共和国アトラスの編纂などの仕事が多忙となり、従来の研究を続けることは困難となってきた。そのため、残念ながら、オリエントにおいて長年収集された資料も出版されず、執筆を約束してきた『一般社会地理学・人口地理学』も未刊と終わってしまった。ボーベクはウィーン大学の講義や1963/64年の2セメスターにわたって行なわれたミュンヘン工科大学での「社会地理学の体系」と題する集中講義において、『一般社会地理学・人口地理学』の概要を示したが、社会地理学の研究を志す多くの人たちが望んでいた同書はついに幻の書となった⁴⁵⁾。

ボーベクの社会地理学の研究は、理論的研究・実証的研究ともに人文地理学の研究者のなかにももちろん広く受け入れられたが、上述したように、ボーベクの弟子のなかには恩師の社会地理学を特に発展させた人はない。そのため、ドイツ社会地理学を創出しドイツ地理学を再生させたのはボーベクであったが、その後の社会地理学を育て発展させたのはむしろハルトケを中心とするミュンヘン学派であったとみることができる。

3) 地理学体系論

人文地理学へ社会地理学のアプローチを導入したボーベクはまた、地理学の体系化をも試みている。冒頭で述べたように、ボーベクは戦時中においてすでに「地域研究における地理学の役割」について考察しており (Bobek, 1942)、早くからこの問題に興味をもっていた。シュティクルバウアーによると、先にも触れたように、「1950年代・60年代の新しい地理学構築への動きの中でボーベ

クは最も華々しく活躍した地理学者の1人であった」(Stiglbauer, 1983)。彼が2つの論文 (Bobek u. Schmithüsen, 1949; Bobek, 1957) によって示した新しい体系は、戦後約20年間にわたってドイツ地理学界で受け入れられてきた。

ボーベクは、地理学の体系について段階的な統合を考える⁴⁶⁾。すなわち、一般地理学を原初的地理学 (Elementargeographie) と呼んで地理学の基底におき、それらを統合したものをラントシャフト学 (Landschaftskunde) とする。ラントシャフトは空間的現象複合体であり、これを究明するのが一般地理学の目的であるとする (Bobek, 1951d)。

1942年の論文においても、ラント (Land) やラントシャフトに関する考察⁴⁷⁾はある (Bobek, 1942) が、1949年に発表されたシュミットヒューゼンとの共著論文 (Bobek u. Schmithüsen, 1949) においてラントシャフト概念は一層明確に示されている⁴⁸⁾。この論文で強調された第1の論点は、ラントシャフトが地理学の研究対象である地表もしくはその部分空間の、高次な統合物であるということである (手塚, 1987)。ボーベクによると、上述したように、地理学の研究対象は無生物界、生物界、精神界 (人間とその創造物) の3者からなり、それらの領域ではそれぞれ異なった種類の法則が成り立つ。ラントシャフトはこれら3者に属する現象が相互作用に組み込まれ、複合的な作用の場に統合されたものである。したがって、ボーベクのラントシャフトのなかには自然地理学的内容と人文地理学的内容とが常に含まれており、トロル (Troll, C.) の場合と類似して、彼は生涯を通じて地理学の二元論を受け入れることはなかった⁴⁹⁾。

第2の論点は、ラントシャフトを地誌学とは違って法則定立的な分野として位置づけたことである。ラントシャフト学 (Landschaftskunde) では比較に基づいて地表の部分空間を典型的に把握することを目的とする。したがって、1回限りの現象は意識的にその研究対象から除去される。ラントシャフトは典型的な地域であり、構造を含めた形態論、生態学 (構造形成過程論)、歴史ないしは発

生学の3分野からアプローチされる⁵⁰⁾。

さらに1957年の論文では、地理学における一般地理学と地誌学の位置づけを試み、両者の中間に地表構成要素の連関構造を類型的に捉えるラントシャフト学が存在することを強調する (Bobek, 1957)。しかも、ボーベクによると地理学は対象科学 (Objektwissenschaft) であって、ヘットナーが考えたようなコロロギー科学ではない。コロロギー原理によれば、地理学的考察は現象自体ではなくて空間的・要因的関連を指向し、関係科学的な方向に向かうことになる。個々の現象間の関連を主にその因果関係においてみようとする限り、それはおそらく必要な補助手段であったろう。しかし、今日では多様な地表領域 (Erdsphere) を客観的全体として把握することが形態的考察方法への過程において可能となったので、この必要は解消した。

この新しい見方は必然的に地表領域全体を1つの連続体 (Kontinuum) として把握することとなった。それはまた、リッター (Ritter, C.) のような地理的個体 (geographisches Raumindividuum) の発想を許さないものとなった。

ところで、ラントシャフトへの到達は段階的統合によってなされる。自然的な全複合体のうえに人間的な内容を加えることによって新たな統合段階をもたらす。その場合に、統合段階が高次になるほど全体的統合性は弱くなり、その複合体は不安定なものとなることはいうまでもない。しかし最終的な統合段階では、個々の要素の特性の上にさらに新たな特性を加えた1つの新しい全体 (neues Ganzes) に融合されるとみる。

これに対して、地誌学は個性追求的な分野であり、統合度のより高い位置にある。地誌学の目標は、全地表面または部分空間の個々または集団においてその全体的特性を把握し記述することにある。そのため、地誌学は最高次の統合段階であり、ラントシャフトとは密接な関係にある。すなわち、地誌学はラントシャフト学の上に成り立つものと考えてみる。リッターの『エルドクンデ』が無駄な骨折りとなったのは、当時の一般地理学が地誌研究にとって必要な武器を供給し得なかったことにあ

るとする。地誌学にとって必要なことは、目的に応じて現実を抽象化したモデルをも含めて、よく定義された概念を形成することである。そこでは、比較ラントシャフト学 (vergleichende Landschaftskunde) の重要性が特に強調される。

このように高次の統合を意図し、しかも全体には個々にはない特性が付加されるとしたラントシャフト学は、実証主義地理学 (positivist geography) の台頭とともに問題視されるようになった。バーテルスは教授資格論文のなかで、ラントシャフト概念は漠然としたもので、その全体性の主張は経験的な実証の対象とはならず、実際の地理学研究においてなんら具体的な指針を与えないとした (Bartels, 1968, S. 67, 手塚, 1987)。

こうしたバーテルスの主張はその翌年の大学紛争さなかに開催されたドイツ地理学会キール大会では主導的な役割を演じることとなった。キール大会において学生や若い地理学者の批判の中心をなしたのは全体性を重視するラントシャフト学や地誌学であり、それらを基盤とした従来の地理学や地理教育であった (Fachverband, 1970)。彼らは、ラントシャフトは空想的な全体 (fiktive Ganzheit) であって不毛の議論であると叫んだ。

それゆえ、キール大会には参加しなかったボーベクにとっても、それはきわめて不快な出来事であった。ボーベクの「自伝」ではこのことには全く触れていないが、キール大会における新しい分析的計量的地理学の導入は彼の信念をぐらつかせることとなった⁵¹⁾。しかも、年老いたボーベクがこの痛手をその後の学問的発展において克服することができなかったのは悲劇であった。彼が例の『一般社会地理学・人口地理学』を幻の書としたのもこの事件のためではないかと推測される。注目すべきことは、当時62歳になっていたボーベクが統計学の講義にでて新しい研究手法を修得しようとし、1971年の退官記念講演において学問理論的アプローチの複数性を受け入れ、分析的科学理論をも取り込もうとしたことであった (Lichtenberger, 1990)。

ボーベクは退官記念講演では次のように述べている (Bobek, 1972)。「今やドイツ語圏の地理学

は英語圏の地理学に比して立ち後れの状態にある。バーテルスの著作 (Bartels, 1968) は一種の触媒的な役割を果たしてきた点では評価されうる。とはいえ、それによって大切な子供までも捨てることはできない。すなわち、ラントシャフトにいたる段階的統合という本質的な地理学の体系を必要もないのに無理に放棄するようなことはすべきでないであろう」と。しかし一方では、新しい地理学の導入についても否定しない。「新しい動きに逆らうことはできない。実用主義的・分析主義的科学論は仮説形成を問題にするのではなく、むしろ理論の検証を問題にするものである。しかし、地理学にとって形式化や数学家が特に必要であるとは思えない。それによってむしろ、近い将来観察経験の不足や直感の貧困化が心配である。」「地誌が地理学の中心を占めるとは今後主張されないであろうが、抹殺されることはないであろう。将来は純粋に科学的衝動に基づいた唯一の地誌学的構成の探求と表現を目指して計画されることになるであろう」と。

このように、ボーベクは退官記念講演においても、基本的には以前からの考え方を踏襲しながらも、新しいものを取り入れようとする態度がうかがわれる。このことをリヒテンベルガーは驚きの眼をもって眺めている (Lichtenberger, 1990)。

4) 中心地研究

上述のように、ボーベクの研究は中心地ないしは都鄙関係に関する研究から始まった。国際地理学会アムステルダム大会の発表では中心地システムへの工業都市の重合を指摘し (Bobek, 1938)、さらに、ドイツ地理学会バート・ゴードスベルク大会では工業化時代の中心地システムに妥当するいくつかの点を指摘してクリスタラー理論の欠陥を補った (Bobek, 1969)。社会を類型化することによってオリエントにおける高利貸資本主義理論に到達したのも、都鄙関係の研究を通じてであった。ラウテンザッハの地理的形態変化論 (Formenwandellehre) (Lautensach, 1952) に対する批判においても、ラウテンザッハのいう地表現象の規則的な空間的変化のなかに純粋に人文地理学的要因に基づく都市を中心とした中心・周辺の空

間的变化が含まれないことを指摘している (Bobek, 1953)⁵²⁾。さらに、オーストリア共和国アトラスの編纂においても中心地システムは国土の総合的考察として最も重要視され、1960年代以後中心地システムについて数編の論文と2冊の大著が刊行された。したがって、ボーベクの人文地理学における実証的研究においては、中心地研究ないしは都鄙研究が常に中心に据えられていたといっても過言ではない。

ボーベクの学位論文やアムステルダム大会の発表論文についてはすでに触れたので、ここでは主に、「工業時代における中心地理論」とオーストリア共和国アトラスにおける中心地研究についてとりあげることにする。ボーベクは工業時代を、①第1次および第2次産業が衰退し第3次産業が発展した時代、②都市化の進展により人口の80%以上が都市化地域に居住する時代、③経済的にみると、農林業の付加価値はリекреーション機能を含めても10%にも達しない時代、として特徴づける。このような時代においても、中心地理論は基本的には支持されるとしながらも、批判的に考察している。

ボーベクは1938年論文においてすでに、絶対的中心性⁵³⁾による中心地の評価や工業と商業・サービス業とを区別した分析の必要性を指摘してきた。本論文ではこれに加えて、同一レベルの勢力圏でも中心地階層の上昇とともに勢力圏が拡大するのを認めないことはクリスタラー理論の欠陥であるとしたほか、中心施設が将来分散化する可能性を示唆する。中心地——あらゆる中心的サービスの集積——は、1927年の論文においてすでに推測したように、交通機関の発達によって、諸活動の集積への必要性がもはや存在しない時代が来るであろうと考える。本来分散していたサービスの集中化は交通条件の発達によって始まったので、中心施設の立地にとって交通条件は重要である。これに対して、消費者にとって交通費負担が著しく軽減されると、集積は再び分散に転ずることが可能である。ボーベクはそうした考えを以前からもっていたが、どのような条件下で分散化に向かうかは明確にしていない。1970年代における反都市化

現象 (counterurbanization) を予知していたかどうかは別として、ボーベクの発想は常に歴史的な事実に根ざした、きわめて柔軟なものであったといえる。

1960年代後半には、オーストリア共和国アトラスの編纂の過程において中心地に関する論文がみられるようになる (例えば, Bobek, 1966)。それらの研究成果は、最終的にはアトラスの2冊の解説書にまとめられる。『オーストリアの中心地システム』(Bobek u. Fesl, 1978) は、西ドイツ地誌・空間整備研究所によって調査された『クルチュカ報告』(Kluczka, 1970) と対比されるが、勢力圏図について説明した『クルチュカ報告』に比べて、本書は狭い空間を丹念に調査しているだけに優れた内容をもっている (森川, 1980)。

本書は2度の調査による詳細な定量分析により、期待される将来発展方向について動態的に考察したものである。ボーベクらは周辺調査法と中心調査法とを併用して調査しており、地域計画への応用とともに、法則性の発見を目的とした種々の分析を試みている。それはちょうど、調査地域全体の詳細な実地調査に基づいてその結果を詳細に記述した後に、注目すべき一般性について考察する地形学の論文とも類似した手法がとられる。

例えば、中心地人口と勢力圏総人口との関係は通常1:5であるが、低次中心地では比率の分散が大きく、また中心地の機能タイプによっても大きく相違するという。また、最大限拡大したときの潜在的勢力圏 (POT-Bereich)⁵⁴⁾ を設定してその圏内全域におけるサービス活動人口/居住人口によってサービス供給比率 (Dienstquote) を求めた結果、農業的勢力圏で低く観光地勢力圏で最も高くなるとし、「顧客構造の効果」、「縁辺的位置の効果」、「高次中心地による翼下の効果」などがみられるとする。1959~73年間における変化の考察では、農業地域のサービス供給比率が顕著な増加を示すのに対して、工業地域では年金生活者の増加によって消費水準の上昇は乏しいという。また、中位中心地と中位圏との間でサービス就業者の増加率を比較すると、農業的勢力圏をはじめ多くの勢力圏では中位中心地の方が周辺地域より

も高い増加率を示すが、観光地などでは逆転しており、地域発展の推進力に差異があることを示唆している。

ヘスル・ボーベクの共著として刊行された次巻 (Fesl u. Bobek, 1983) では、1980/81年の新しい勢力圏調査を加えて、下位中心地の潜在的勢力圏単位にサービス供給力や人口増加率を検討するとともに、1959/1971/1981年の20年間における下位中心地の動態を考察している。下位中心地の変化は激しく、大都市郊外では新たな中心地が発生するが、縁辺地域では消滅していく傾向があるという。

このような考察は全国の中心地システムの総合的な丹念な調査によって初めてえられるもので、仮説をたててそれだけを鋭く実証しようとする英語圏の中心地研究とは異なった特色が認められる。ボーベクは中心地研究の発展が主として英語圏地理学者によってなされたことを率直に認め、西ドイツの研究には批判的である (Bobek, 1972)。ボーベクの研究には近代的な計量的手法が使用されていないとはいえ、それをカバーする十分な成果を収めている。

5) オリエント研究と発展途上国論

ボーベクのオリエント研究には地形学的研究など社会地理学以外の研究が多く含まれるが、ここでの考察は、高利貸資本主義論を中心とした社会地理学的研究に限定する。

ドイツ地理学会 ミュンヘン大会の発表論文 (Bobek, 1951a) は、未刊に終った『オリエントの社会地域』を要約したものであるが、それには多くの内容がまとめられ、問題点も指摘されている。そのなかでは特に、砂漠を活動の場とする遊牧者の定住農民に対する優位性、都市的集落の形成原理、高利貸資本主義や都市の寄生的性格、都市を取り巻く農村の地帯形成、定住過程からみた耕地地割の紐状地割からブロック状地割への形態変化などが考察され、遊牧地域、小作農と都市の地域、山地地域 (Kabylenland) の3つの社会地理学的空間の存在を明らかにした。

ボーベクはこうしたオリエント研究を通じて、世界諸地域に関する社会経済の発展段階や発展途

上国論に興味をもつようになった。高利貸資本主義の名称を初めて使用したのは、ミュンヘン大会（1948年）で発表した「近東地域を事例とした社会空間形成」（Bobek, 1951a）や1950年の「比較社会地理学の輪郭」（Bobek, 1950）であったが、この研究は解釈論現象学的研究としての成果といえる⁵⁵⁾。生活様式による社会経済の類型化の試みは、1938年論文においてその萌芽がみられる。すなわち、1934年以降のイラン調査⁵⁶⁾に基づいて、ポーベクは地中海地域やオリエントの都市では高利貸（Renten）の役割は無視しえないことに注目し、上記の論文ではオリエント都市について詳しく説明する。

それによると、オリエント都市の発生は本質的には防御的動機によるもので、遊牧民出身の支配者の定住によって形成されたものであった。こうした集住（Synoikismos）のもとでは商業や手工業も現われるが、農業的要素も多分に含まれる。農村では、土地の大部分が都市住民の手によって所有されるだけでなく、その他の名目で労働収益の多くが都市に流れ込む仕組みになっている。特に重要なことは、乾燥地域をたびたび襲う凶作のため、農民は都市地主や金融業者からの借金によって縛られ、負債（Verschuldung）から脱出できないことである。農民たちは収益の1/2から4/5が年貢として搾取されるため、最低生活に甘んじ、富の蓄積や技術の改善などの余裕は全くない状態におかれている⁵⁷⁾。

一方、都市住民は農民に寄生した生活を営み、しかも生産への投資はほとんどみられない。都市の商工業は大地主の需要を賄う奢侈品が主で、しかも、砂漠からの残忍な征服団によって都市は再三再四占領され、市民の自由な発展への萌芽はつみとられるため、都市の経済発展には自から制限があった。

これに対して、ヨーロッパの都市では、地代をうる市民はわずかしがなく、封建的地主は最初から政治的配慮によって遠ざけられ、都市には本質的には商工業だけが存在した。そこでは、農民との商品交換が最重要な機能となり、生産を営む市民を主体とする都市タイプが出現した。したがっ

て、このようなタイプの都市においてだけ生産資本主義（produktives Kapitalismus）が発達し、都市を根本的に改良することとなったと考える（Bobek, 1950）。

ポーベクの主要業績の1つに数えられる「地理学的観点からみた社会経済発展の主要段階」（Bobek, 1959）は、ロストウ（Rostow, 1960）の経済成長段階説よりも1年前に地理学的な観点から考察したものである。ロストウに比べて、近代化以前の経済発展にウェイトがおかれている。わが国では木内（1968, p. 160）や西川（1970, 1985, pp. 81-92）による詳しい紹介があるので、ここではごく概要を説明するにとどめる。

ポーベクによると、地理学の任務は空間的に多様に分化した生活の営まれる地表面を記述し科学的に説明することであるが、それは、歴史的発生的考察方法においてのみ達成される。その場合に、地理学的観点からは、次の指標が重要である。①現在の生活形態、②その社会における種々の生活様式集団の共演関係、③人口密度や年齢構成とその動態にみられる社会の人口の数値、④空間的集落的な類型化やその他の景観の特徴。これらの指標を考慮することによって、①食料採取段階、②採取、狩猟、漁労に特化した段階、③遊牧社会を伴った氏族制農民の段階、④支配者によって組織された農業社会の段階、⑤古い都市と高利貸資本主義に基づく段階、⑥生産資本主義、工業社会、新しい都市の段階、に区分する⁵⁸⁾。

このなかでも特に重要なのは、高利貸資本主義の段階である。そこでは、①十分な市場の欠如とか技術の未発達が最重要な問題ではなく、上位階層の多くにとって生産労働を軽蔑したり、それに無関心であること、②なんらの見返りもなく極端な搾取によって生産者は貧困にあえぎ、技術的進歩を阻止すること、に特徴がある。このような社会においても、搾取者は利益の追求に努力し、打算的で、経済的合理性に則って行動するという点ではまさに資本主義である。ただ問題は、生産と結び付かないだけである。さらに、広く発展途上国問題についても触れ、人口増加による生活水準の低下を指摘する。そして、外からの援助は悪循

環を招く危険性があるとし、政府側の深い洞察と支配者層の献身的努力が前提であると主張する。

発展途上国問題に関するこのような考え方は、次の「低開発国問題について」(Bobek, 1962c)では一層明確なものとなる。この論文では、ベリー(Berry, 1961)やギンスバーグ(Ginsburg, 1961)の論文にも目を配りながら、10指標(1955年前後)を使って世界各国を経済状況によって区分する。しかし、発展途上国は、先進工業国と同様な社会経済構造をもちながらもただ量的にだけ異なるので、先進国の援助によって発展がはかれるとするベリーらの発想とは異なる。ボーベクにおいては、発展途上国の要因は歴史的な考察によってのみ理解され、結局は——もちろんすべてに該当するわけではないが——高利貸資本主義の問題に帰着する。生産資本主義の発達はヨーロッパの市民社会から発生したもので、市民的精神(bürgerliche Geist)こそが重要である。それゆえ、都市の自立的政治共同体と自立的な政治形態の形成、高利貸資本主義的経済観の克服が肝要であるという。具体的には農業改革が必要であるが、冷戦下の合衆国の援助にはジレンマを伴うとみる。

高利貸資本主義については、さらに1974年の論文でも扱っている(Bobek, 1974)。それは、オリエントの高利貸資本主義においても最近では変化がみられ、いまやオリエントの都市は寄生的とはいえなくなったとするヴィルト(Wirth, 1973)論文に対するコメントである。そこでは、オリエントの高利貸資本主義が最近100年間における先進工業国との接触の時代に発達したことには賛意を表するが、その他の点では意見を異にする。たしかに、オリエントの伝統的都市のすべてが寄生的性格をもっているとはいえないけれども、最近の都市における新しい動きは高利貸資本主義の枠組みのなかから発生したものではないとする。1960年代末には、近代化理論とは別に従属理論(dependency theory)が登場してきたが、ボーベクの高利貸資本主義論には従属理論と類似したところがある。

6) オーストリア共和国アトラスの編纂

オーストリア共和国アトラスの編纂を行なう空

間研究委員会のスペースは西ドイツの地誌空間整備研究所に比べるとずっと小規模で、筆者が訪問した1970年9月下旬にはウィーン大学地理学教室協の比較的大きい1室に数人の研究者が作業する状態であった⁵⁹⁾。

アトラス編纂の目標は、国内各州のアトラスや外国のアトラスにみられるように、本来一種の「地図による『地誌』」を目指したものであった(Bobek, 1975)。空間が基本的に意識されている国々ではアトラスは国民の一般的な科学情報にとって欠くことのできないものとみられるからである。とはいえ、百科辞典的地誌としてのアトラスが当初からの目標であったわけではない。委員会の意向ではオーストリアの空間研究(Raumforschung)への貢献を考え、オーストリア国民の生活にとって重要な空間構造の科学的把握に優先的な関心がおかれていた。

しかし、アトラスの編纂に当たっては、技術的にも財政的にも制限があった。特に、①適当な統計資料の不足、②十分な科学的基盤や準備作業の不足、③特定テーマについての担当者がすぐには得られないこと、など多くの問題があった。大戦間時代には公的な統計調査が行なわれず、就業人口や通勤人口などの基本的資料は1960年代半ばにやっと得られるようになったが、1964年に実施された企業センサスは1960年代末に利用されるようになり、1971年センサスは1974年以後になって初めて全国的に利用されるようになった。さらにまた、分析手法の急速な進歩もアトラス編纂作業を遅らせる原因となった。また当初考えていた以上に、空間構造の動態的考察には注目する必要性が認識された。したがって、第1分冊の刊行以後大幅な見直しも行なわれた⁶⁰⁾。

アトラスでは主に1961~64年の資料が使用され、全図のうち2/3は100万分の1の縮尺によって統一された。その場合に、完成時のアトラスの利用価値についても問題があった。しかし、経済構造や人口構造、機能的構造を示す地図でもその後10年間にはそれほど変化せず、全く無価値とはいえないこと、古くなった資料でも今後の調査計画によって説明の補足されること、が考えられた。

全119葉の図は、内容的には、〔I〕概観（中央ヨーロッパにおける位置）（1図）、〔II〕地形（7図）、〔III〕気候と河川・湖沼（13図）、〔IV〕植生、土壤類型、自然地域分類（5図）、〔V〕集落空間、方言および政治領域の形成（6図）、〔VI〕集落（10図）、〔VII〕人口一分布、発展、構造（18図）、〔VIII〕農林業（20図）、〔IX〕エネルギーと鉱工業、大企業（11図）、〔X〕商業、交通、観光（10図）、〔XI〕行政と文化（6+3図）、〔XII〕機能的構造的総合分類、政治的關係、空間整備問題（12図）からなる⁶¹⁾。

このうち最後の第XII部は、統合的考察に向けられたものである。そこでは、中心地システムや通勤関係、市町村の就業構造、市町村税収、選挙結果、生活水準、開発問題地域などの図が含まれており、「サービス供給と就業の中心地による地域形成」の図（XII/3）も描かれた。この図では階層区分された中心地にその経済的特性（商業・サービス業都市か工業都市か）と相対的納税力（relative Steuerkraft）が付けられ、各中心地の持つ勢力圏の中では4区分されたサービス供給の難易度、通勤条件（毎日通勤と週通勤に区分し3段階に分類）が盛り込まれている⁶²⁾。

このXII/3図は、オーストリア共和国アトラスでは第XII部のなかでも特に重要なものと考えられる。生活の質はサービスの供給と密接に関係しており、装備のよい中心地へのアクセスが地域形成にとって決定的な重要性をもつからである。さらに、有業人口の生活と密接な関係にある通勤流動が生活空間形成力として第2に重要なものとなる。中心地のもつこの2つの役割を地域形成力と考えるのは、都鄙関係を重視してきたボーベク地理学を特徴づけるものとして注目される⁶³⁾。XII/3図によると、高次な中心地は中心地機能の優れた装備のため自動的に工業を吸引しているのに対し、本来は純粹の工業集落も時の経過とともにサービス施設を吸引するという。また一般に、西部の観光地や地方中心都市（グラーツを除く）周辺地域は税収増加地域であるのに対して、農村地域の大部分や工業地域の一部では増加が乏しいという。

このように、アトラス編纂においてはラントシ

ャフトへの段階的統合（stufenweise Integration zur Landschaft）の考え方が活かされた。ボーベクは、複雑な空間的現実の地図表現においても単純なものから複雑な統合への過程の原理が妥当すると考えていた。第VIII部の農林業に例をとってみると、農業的土地利用などについて図示した後、農業経済地域（VIII/16図）をもって高次の統合図とする。それは、農業社会構造を考慮しながら、土地利用、家畜保有の卓越状況を総合的に把握することによって最初35のタイプを抽出し、それを10のグループに整理し、最終的には、①資料作物を重点とする家畜卓越地域、②作物・家畜経済結合地域、③家畜経営を補助とする耕作考察中心地域の3地域に区分したものである。その成果については、オーストリア農業は過去半世紀間には、帝国の崩壊による食糧自給強化、戦後の市場自由化による適地適作主義への移行、最近の労働力不足による経営の省力化・合理化へと著しい構造変化を遂げてきたこと、チューネン圏構造は戦後の労働力不足で破壊されるようになってきたが、過去10年間には完全に機械化され、それが圏構造の破壊を若干遅らせることになったと述べている（Bobek, 1975）。そして、最後の「農業社会的タイプ」（VIII/17図）では、市町村単位に経営規模⁶⁴⁾と専兼業別経営との結合によって $7 \times 3 = 21$ 類型の地域に区分している。

また、シュタインバッハ（Steinbach, J.）の作業になる道路交通（X/8図）では、アクセシビリティ指数を分析している。まず全国2,350の結節点（Knoten）と約8,000の結節点間結合（Kanten）を設定し、各結節点間結合ごとに実距離と時間距離によってウェイトづけした距離を調査し、両者の関係からアクセシビリティ指数を求める⁶⁵⁾。これによると、ウィーン地域が良好であり、ケルンテン地方が最悪であるが、南アウトバーンの開通により将来は改善されるという。

以上2、3の例を示したが、各図葉ともに十分な調査研究に基づいており、記載内容も解説も実に豊富で、学問的にも優れたものであり、単なる百科辞典とはいえない。それぞれの図は精選され、各図の作成には長時間を要したことが十分理解さ

れる。したがって、各部門ごとに中心地システムのような分厚い解説書がつけられなかったのが惜しまれる⁶⁸⁾。

われわれはアトラスといえ、合衆国の『ナショナル・アトラス』(1970年)やイギリスの『アトラス・オブ・ブリテン』(1963年)、フランスの『アトラス・ド・フランス』(1960年代)、わが国の『ナショナル・アトラス・オブ・ジャパン』(1977年)などを思い浮かべるが、オーストリア共和国アトラスはこれらとは全く異質のものである。これらのアトラスは地形・地質から人口・経済まで通り一遍の地図からなり、一般読者の利用を対象としたものである。これに対して、本アトラスは、きわめて高度な地理学的内容をもつものといえる。旧東ドイツやチェコスロバキア⁶⁷⁾、ハンガリーなど東欧諸国でもすぐれたアトラスが刊行されてはいるが、オーストリア共和国アトラスとよく似ているのはイムホフ (Imhof, E.) の編集による『スイス・アトラス』(1965-78年)である。しかし、『スイス・アトラス』には中心地圏の調査はなく、いわんや中心地に基づく地域形成や段階的統合のような発想は含まれていない⁶⁸⁾。

オーストリア共和国アトラスは空間整備政策などにも十分に活かされ、地理学の社会的貢献としても実に重要なものといえる。このアトラスは、『スイス・アトラス』のように、完成後も新しい図幅をつぎ出す仕組みにはなっていないが、コンピュータを用いた『オーストリア空間発展アトラス (Atlas zur räumlichen Entwicklung Österreichs)』が1984年にはすでに刊行を始めており、実質的には受け継がれている (Kretschmer, 1991)。わが国などでも、大いに見習うべきものといえる⁶⁹⁾。

IV. 結びにかえて

以上の考察は、ボーベクの研学生活に照らして研究の流れを理解し、その研究業績を地理学史のなかに位置づけようと試みたものである。それによって、ボーベクが今世紀の20年代末から60年代の地理学をリードし、地理学者として1人で何人分かの業績を遺した人であったことが明らかとな

った。とくに鋭い洞察力によって地理学の発展方向に対してパイロット的な役目を果たしたほか、都市地理学から地形学・生態学まで幅広い分野で活躍した。彼はまさに、トルロとともに、ドイツ語圏地理学界を代表する20世紀の巨匠と呼ぶにふさわしい。

ちなみに、ホワイトハンド (Whitehand, 1985) によると、1971~75年間の社会科学引用指標 (Social Science Citation Index, SSCI) において他の研究者によって100以上引用された32名の人文地理学者のなかにボーベクは含まれる⁷⁰⁾。32名のうちでは、6名が英語以外を第1国語とする人であり、ドイツではクリスタラーとボーベクだけが収録されている。ボーベクの場合には主にドイツ語圏の人たちによって引用されたものではあるが、英語圏以外の地理学者は過小評価されがちな中であって、しかも他の英語圏地理学者の多くが35-44歳代 (1975年現在) であるのに対して、ボーベクの場合にはすでに退職後であった。これによっても、ボーベクの研究がいかに重要視されているかをうかがうことができる。

しかし、ボーベクは常に駆け足で「列車を乗り換えながら」研究を進めたため、完成を後に残した研究分野も多い。ボーベクは1950年代から始まったオーストリア共和国アトラス編纂の仕事によって大きな負担を強いられ、予定していた多くの研究が未完成に終わることとなったが、アトラス編纂には委員長としてのボーベクの地理学に対する考え方が活かされ、それによって、オーストリア共和国アトラスは学問的にも優れたものとなった。それは特に、地理学の社会的有用性を具体的な形で示し、この方面でも地理学の地位向上のために尽くしたボーベクの功績は大きいといえる。

謝 辞

本稿を、ボーベク先生の霊に捧げる。先生のご業績の一端を紹介することによって、先生からいただいた多大のご厚意と学恩に感謝の気持ちを表したい。特に、筆者がウィーンのお宅を訪ねたとき青二才の外国人を温かくもてなして下さったこと、先生の九州旅行 (1973年秋) に同伴したときのことなどの思い出が蘇ってくる。また、何度もさしあげた質問状に快くお答えいただき、必要な

資料をそえて執筆を積極的にご援助下され、レジュメを校閲していただいたマリア夫人のご厚意に感謝します。なお、資料収集においてお世話になった Borchardt, Ch. 教授 (Stuttgart 大), Hommel, M. 教授 (Ruhr 大), 山根 拓助手 (都立大) にも謝意を表したい。

注

- 1) *Allgemeine Sozial- und Bevölkerungsgeographie. Lehrbuch der allgemeinen Geographie, Bd. V*, Walter de Gruyter & Co, Berlin を指す。このシリーズは全10巻からなり、未刊に終わったのはこの巻だけである。
- 2) この章では、断わりのない限り Bobek (1983) と Bobek (1989) による。前者はバティマーの依頼による「自伝」で、後者はそれに補足してドイツ語で書いたものである。末尾には共同執筆をも含めて170編 (オーストリア共和国アトラスの業績を加えると計217編) の著書・論文名が記されている。なお60歳までの半生については、Hartke (1963) にも詳しく述べられている。
- 3) その一部は作曲されたといわれる。母が小説家という点では奇しくもクリスタラーの家庭と似ている。
- 4) Lichtenberger (1990) の紙碑においても、「画家の才能を学問に用いた人」と評している。図の作成や景観描写に優れ、その才能はオーストリア共和国アトラスの作成にも活かされたという。
- 5) 父の出身地ではチェコ語とドイツ語が話され、母の出身地ではドイツ語とスロヴェニア語が話された。
- 6) ジェルヒは後にヘットナー (Hettner, A.) の後任としてハイデルベルク大学に転出し、さらにウィーン大学 (一時はボーベクの同僚として) にも勤めた人で、*Geographers: Biobibliographical Studies*, vol.7, (1983), pp. 117-124にも Matznetter, J. による紹介がある。
- 7) Bobek (1989) ではただ分量の関係としているが、Stiglbauer (1983) によると、分割されたのは当時の学問的評価によるといえる。
- 8) Lichtenberger (1990) は紙碑のなかで、「異常なエネルギーと多彩な人間性をもつ人」「ありあまる創造的な想像力」をもち、「一見異なったテーマをも結合させる能力をもつ人」、「稲妻のような早い理解力をもって形態 (Gestalt) や過程現象 (prozessuale Phänomene) を自然空間だけでなく、人文的空間においても知覚する能力をもつ論客」と評している。
- 9) オーストリアの行政組織は、連邦の下に Land, Politischer Bezirk, Gerichtsbezirk, Gemeinde があり、中級行政地域としての Politischer Bezirk は99で、そのなかに15の都市ベツルク、84の農村ベツルクがある。
- 10) しかし、ベルリンでは隣接科学との接触や国際的な接触機会も多く、イギリスや北欧への旅行の機会に恵まれた。また、戦後活躍した Troll, C., Büdel, J., Louis, H., Krenzlin, A. ら当時の若手研究者と知り合うことができ、イラン研究の機会が与えられたのもベルリン大学にいたためといえる (Hartke, 1963; Lichtenberger, 1990)。
- 11) ラッツェルによって創刊されたもので、今日ドイツ空間研究・空間整備研究所から刊行されている『*Forschungen zur deutschen Landeskunde*』の前身をなすものである。
- 12) Ackerman (1945) のように、合衆国の地理学者は戦時中の隣接科学との共同研究を通じて地理学の無力さを痛感したが、ボーベクの場合には事情は異なっていたようである。
- 13) 当時はまだバーデン・ヴュルテンブルク州はなく、3つの地域に分かれていた。
- 14) シュリューターは1938年にハレ大学を退官したが、後継者の死亡などのため1951年までとどまっていた。ボーベクの招聘のために努力したが、ソ連占領地区 (旧東ドイツ) のため不利な条件下にあった。
- 15) ドイツの大学改革が進み、ボーベクをドイツにとどめおくことができたとしたら、ボーベクにとってウィーンとは違った可能性が開けていたであろうといわれる (Hartke, 1963)。マリア夫人の書簡 (1992, 3, 27) によると、オーストリアの大学では常に資金的・人的援助に乏しく、旧西ドイツのように研究旅行を助成する学術振興会もない。ボーベクは研究室において長らく2人の助手しかもたなかった。
- 16) 合衆国で Sauer (1952) が、乾燥地域の荒廃原因が気候変化によるよりも過牧の影響であると考えたのもこの頃である。
- 17) ドイツ地理学者による写真判読の地理学への応用では、Troll, C. が有名であるが、ボーベクも戦時中以後よく利用している。
- 18) *Encyclopaedia Britannica* 1962では、ボーベクはイランについて多くの項目を担当した。ブリタニカの項目を外国人が担当するのは希なことである。
- 19) ボーベクはイラン地誌と『一般社会・人口地理学』の執筆に専念したい希望をもっていたが、ついに果たせなかった。また彼の学内・学外での仕事が多忙を極め、最初の頃はイギリスや合衆国、イランの大学の客員教授を勤めたが、後にはもっとよい条件の申し出さえも断わらなければならなかった (Hartke, 1963)。
- 20) Hassinger, H. の弟子で、1960年代に新設されたウィーン大学地図学講座の教授を務めた。Hassinger の死後ニーダーエースターライヒのアトラス編集を完成させた。オーストリア共和国アトラスでは第1～4版の地図学的な分野を担当したが、名誉職的なものであった (マリア夫人の書簡, 1992, 5, 8)。
- 21) 特に気候分類、生態学的評価、市町村類型、中心地、経済空間構造は自分で担当した。
- 22) 実際に中心地研究などは空間整備によく利用されている。ボーベクは非常にリベラルな意見の持ち主で、あらゆる種類の計画について常に疑問視し空間整備政策への積極的な参加には躊躇したが、他方では地理学の関心分野として地域研究の価値を認め、それを常に強調していた。教え子たちのなかにはこの方面で活躍している人が多い (Stiglbauer, 1983; Lichtenberger,

- 1990)。ボーベク自身では具体的な地域計画には参加しなかったが、地理学の実用化への変化のなかで大きな貢献をした。80歳祝賀論文集のタイトルを『応用人文地理学論集(*Aktuelle Beiträge zur angewandten Humangeographie. Festschrift zum 80. Geburtstag von Hans Bobek*, Schriftenreihe des Österreichischen Instituts für Raumplanung, Reihe B, Bd. 7, 1983)』としたのもそのためであろう(Schwarz, 1983)。
- 23) そのほか5つのアカデミー委員を勤め、ヨーロッパの12の地理学会の名誉会員に選ばれた。もちろん、オーストリア地理学会会長や国際地理学会オーストリア代表を勤めた。
- 24) ボーベクは1961~77年の間に38編の学位論文を審査した。そのうち、Bracke, B. 教授, Seger, M. 教授(クラゲンフルト大), Steinbach, J. 教授, Nissel, H. 博士(旧西ドイツ), Johannes von Franz 教授(インドネシア)ら7人だけが大学の研究職についている。ボーベクがオーストリア空間研究・空間整備協会(1954年)の創設メンバー、空間研究委員会委員長、中心地研究委員長、連邦空間整備鑑定長の長として空間研究問題に強く関与したため、地理学卒業生に地域研究従事者(Regionalforscher)として多くの就職機会を開発した。彼の弟子の約20人が学位取得後連邦・州その他研究所に就職した。そのうちの数人はウィーン大学やクラゲンフルト大学の地理学教室に非常勤講師を勤めている(マリア夫人の書簡, 1992, 3, 27)。
- 25) 40歳以下の地理学者で独語または英語で書かれた学位論文、教授資格論文およびそれに準ずる優れた論文に対するもので、20万シリングの賞金もつけられている(Mitt. d. Österr. Geogr. Gesell., 133, 1991, S. 363)。
- 26) ただし、ボーベクには資料収集癖がなく、いわゆる「知識の百科辞典」ではなかった。したがって、彼は優れた論文の著者であったが、ハンドブックを書く人ではなかったという(Lichtenberger, 1990)。
- 27) 筆者が1970年9月にボーベク教授を訪ねた際、計量化・モデル化について非常に進歩的な意見を拝聴した(森川, 1972)のは、こうした事柄と対応するようである。
- 28) 中心地の立地要因と工業の立地要因とは異なるので、レッシュのように両者を一緒に市場圏(Marktgebiet)という同一の概念で扱うのは不都合な点が含まれると考えていた(Bobek, 1951d)。
- 29) 合衆国のライリーがその法則を発表したのはこの2年後であった(Reilly, 1929)。
- 30) この論文にはKohl (1841), Hettner (1895), Schlüter (1899)の引用はあるが、Gradmann (1916)はみえない。また、こうした発想はボーベクが全く初めてというわけではない。なお、ギャルピンやコルブの研究(Galpin, 1915; Kolb, 1923)が発表されたのはこれより以前であるが、当時これらの研究は知らなかったと筆者に話された。
- 31) 今日でも歴史時代の人口流入圏の研究は重要視されているようである(森川, 1991)。
- 32) このことはまた、クリスタラーが相対的中心性を研究対象とするのに対して、ボーベクは絶対的中心性・節性、Npdalitätを対象としたといえる。
- 33) この発想は後の「工業時代における中心地理論」(Bobek, 1969)のなかで改めて論じられることになる。
- 34) 1948年のミュンヘン大会発表論文(Bobek, 1951a)における都市の寄生的性格(parasitärer Charakter)についての説明は、英語圏におけるHoselitz (1955)よりも早い。フランスのWeulersse (1938)を引用したものである。
- 35) クリスタラー理論を紹介したBobek (1935b)において、ボーベクはクリスタラーの理論構築については評価しながらも、その実証方法についてきわめて不十分であるとした。それは、中心地システムの実態を重視するボーベクの立場からして当然のことと考えられる。
- 36) Ruppert u. Schaffer (1970)によると、ドイツを中心とする人文地理学の発展期はラツェル以後、①環境決定論期、②可能論期、③形態発生論期、④機能論期について、⑤社会地理学の時代を迎えるとする。
- 37) Bobek (1942)にもヘットナー批判がある。ヘットナーは同一場所(Erdstelle)において他の現象と因果的に結合している現象だけが地理学的なものであって、他の現象にとって特定原因として大きいほど重要であるとするが、空間的に統合された現象の因果的関連を通じて初めて各場所がGanzenとかIndividuum, Landになるといえるのは問題である。例えば、地形や気候と社会構造との間に因果的関係をみだすことは困難である。所与条件との因果的関係は、一回限りの反復性のない姿(Gestalt)としてのLandを考察し記述するには妥当しない。その現象自身の内部的な空間的結合関係にある、たとえ非因果的だとしても、重要な事実を考察することは大切であるという。
- 38) この論文では紙数の関係から引用文献がすべて省略されており、既往研究の影響を知ることができないのは残念である。
- 39) Bobek (1951d)では「研究対象がきわめて複雑なことで地理学者の理論的考察傾向の弱さが地理学的な説明の前進を遅らせてきた」と述べており、理論・法則追究の姿勢はオトレンバラの考え方とは根本的に相違するようにみえる。
- 40) ただし、ヴィダル地理学とボーベクの社会地理学との間には明瞭な差異がある。ヴィダルの生活様式概念は自然環境に対する人間生活の適応として用いられたのに対して、ボーベクは社会地理学における生活様式集団は主として人間社会のなかで考察されるものである(Beck, 1982, S. 184)。
- 41) 個人を階級、集団、構造のメンバーとして捉え、社会集団を社会階級に限定して考えれば、社会階級の重要性や階級間のあつれき(相互作用)を強調する点では、実証主義地理学以後の現代的なパラダイム(Gilbert, 1982)と類似したものと考えられる。
- 42) この点については、山本(1981)や齋藤(1982, pp.

- 42-53) に詳しい。
- 43) なお、ボーベクには地理学の研究対象として経済地理学的な法則追究について論述した論文があり (Bobek, 1951d), 経済地理学的重要性に無知であったり、故意に無視しようとしたわけではない。
- 44) ボーベクの社会地理学における実証的研究成果として最も重要なものといえば、オリエントにおける高利貸資本主義論の構築であるが、これについては後述する。
- 45) マリア夫人からの書簡 (1992, 3, 27) および Hartke (1963) による。
- 46) Bobek (1942) においては「地理学の考察の対象は、ある時はラントシャフト像 (Landschaftsbild) におかれ、ある時はその機能的活動 (funktionelle Getriebe) におかれるが、地理学の見方は常に全体 (Ganze) を指向しており、Land や Landschaft の複雑な特性を捉えるためにあらゆる側面から観察することが重要である」と述べている。この論文ですでに段階的な統合を考えていたかどうかは不明であるが、地理学に対する全体的な見方はすでに現われている。
- 47) 地理学的空間概念として Land と Landschaft は次のように区別される。Land はより大きくより重要性をもった地理的単位であるのに対して、Landschaft は面積的に小規模で重要性も低く、空間的個体としての特徴を維持する最小単位までを含む。しかしその場合に、絶対的な規模は確定されず、ドイツとかボヘミア、チロルは Land とみなされ、ラウジツターハイデやブーマーヴァルトなどは Landschaft とされる。しかし同時に、北ドイツ平原や東ヨーロッパ低地でさえドイツやヨーロッパの Großlandschaften とみられる。こうした面積規模の問題以外に、ある特定の空間を Land という場合には、1 回限りで反復性をもたない特殊な個体 (Individuen) であるに対して、Landschaft はおそらくより大きなものの 1 部であり、反復性のある典型的な特性をもつ空間 (Typen) を考える。
- 48) 手塚 (1987) によると、このラントシャフト概念の枠組みはその後の方法論文献に踏襲され、敷衍され、部分的に手直しして使用され、この論文の与えた影響はきわめて大きなものがあったという。
- 49) 地理学の分裂の必要性はどこにもないとする。それは科学理論上からも独自の科学とみなしうるし、また実際の制度上からいえることである。ただ、それはなんでもかでも含むようなものではなくて、人間の生活重視の観点に立つて十分にふるいに掛けられねばならないという (Bobek, 1972)。
- 50) これは、ちょうど景観生態学 (Landschaftsökologie) における背後の要因解明と類似する。
- 51) キール大会では大家の地理学者の多くが地誌学やラントシャフト学などについて従来の立場を弁護して発言しているが、ボーベクは不参加のため発言はない (Fachverband, 1970, S. 208-232)。たしかに、ボーベクの地理学はラントシャフト学については批判される立場にあるが、地誌学よりも一般地理学を指向し理論や法則性を追究しようとする、さらに空間研究を通じて地理学の社会的有用性を高めたことはどのように受け止められたのであろうか。これに対する学生側の反応を読み取ることはできない。ボーベクは60歳を過ぎた高齢にもかかわらず世界の新しい研究に注目しており、例えば、Bobek (1969) ではベリー (Berry, B. J. L.) の一般フィールド理論 (general field theory) をも評価していた。
- 52) ボーベクの批判はこれだけではない。ほかにも、地理学的実態が空間的に連続的に変化するという発想は古くからあること、非連続的な現象が小縮尺の分布として連続的に扱われることをあげている。
- 53) Christaller (1933) は相対的中心性を考えたが、中心調査法を用いて相対的中心性を求めることは不可能であるし、また現実それを正確に測定することは困難であり、今日では絶対的中心性の方がよく利用されている。
- 54) アトラスの中心地勢力圏の図では、「完全所属圏」「所属のやや弱い圏」「競合圏」の3種に区分して色分けして記載されている。潜在圏とは後2者の圏を完全所属圏域に含めた場合である。
- 55) 1988年5月17日付けの新聞『Die Press』に「Hans Bobek—85 Jahre」を掲載したりヒテンベルガーによると、ボーベクは地球科学者としての厳密な実証主義と文化科学者としての解釈論現象学的理解とを合わせもつ人であり、後者の研究の中心に、マックス・ウェーバーとゾムバルト (Sombart, W.) の思想を発展させた高利貸資本主義理論が位置づけられるとする。
- 56) イラン調査は1934年 (8カ月)、1936年 (3カ月)、1956年 (7カ月)、1958/59年 (テヘラン大学客員教授)、1975年 (1カ月)、1978年 (1カ月) の計6回であった。1956年のイラン旅行については同行した若き生物学者 (現ウィーン大学生物学センター教授) の旅行記が発表されている (Löffler, 1991)。
- 57) それは農産物加工業が発達した場合においても同様であった。
- 58) これらの地域区分図は示されているが、具体的にはどのようにして区分されたのかについての分類操作の詳細は不明である。本論文だけでなく、ドイツ地理学者の研究には具体的な説明のないものが多い。
- 59) オーストリア共和国アトラス編集の空間研究委員会では1960年には1人、1964年に2人、1960年代末に4人のスタッフがいただけであった。そのために完成まで長い時間を要したという (マリア夫人の書簡, 1992, 3, 27)。
- 60) 出版は初版の1961年から第6版の1977年まで6回に分けて行なわれた。
- 61) その後1986年には補遺として4葉の図 (人口増減率、居住人口の社会経済構造、観光のタイプと発展状況、供給中心・労働中心による新しい地域形成) が刊行された (Fesl u. Bobek, 1986; Kretschmer, 1991)。
- 62) このアトラスは色彩的にも美しい多色刷で、それに記号を加えて相当豊富な内容が含まれており、各図について十分な解説が必要である。解説書が未刊に終わったのは惜しまれる。
- 63) Schöller (1960) の Mobilitätszentren の発想も類

似する。

- 64) 経営規模では「10ha 以下の農家が70%以上」などが分類基準として使用されている。アトラスではこのような基準が多いが、10ha や70%などの数値がどのような意味をもつのか解説書が欲しいところである。
- 65) 各結節点間距離 (D_{ij}) と平均時間距離により短縮された距離 ($\bar{D}_{ij}$) を求め、アクセス指数 Z_i は $Z_i = \sum D_{ij} / \sum \bar{D}_{ij}$ によって求める。この説明は図中にある。
- 66) ただし、1973年1月9～31日の展示会では、各国に簡単な説明がみられる (Kommission für Raumforschung der Österr. Akad. d. Wiss. unter der Gesamtleitung von Prof. H. Bobek (Hrsg.): Ausstellung. Atlas der Republik Österreich.)。
- 67) 筆者の管見する限り中心地図が描かれたアトラスは少ない。チェコスロバキアのアトラスには収録されている。なお旧西ドイツの場合には、種々のアトラスが編纂されている。
- 68) 1961年のスイス連邦議会の決定によって実施され、1978年までに9判が刊行された (筆者は国会図書館において第8判までの86図を閲覧したが、第9判についてはみていない)。その後 Spiess, E. 教授の編集のもとで新しい判が継続され、1991年には第12判の刊行をみた (Kretschmer, 1991)。
- 69) わが国では西川 治らを中心として国立地図学博物館 (仮称) の設設計画が進められてはいるが、残念ながらまだ実現をみていない。
- 70) これは、Johnston (1979, 1981) および1952～83年間のアメリカ地理学会賞受賞者リストの3つの資料から抽出したものである。

文 献

- Ackerman, E. A. (1945): Geographic training, war-time research, and immediate professional objects. *Ann. Assoc. Amer. Geogr.*, **35**, 121-143.
- Bartels, D. (1968): *Zur wissenschaftstheoretischen Grundlegung einer Geographie des Menschen*. Geogr. Zeitschr., Beihefte, 225S.
- Blanchard, R. (1911): *Grenoble, étude de géographie urbaine*. Paris (未見)。
- Beck, H. (1982): *Große Geographen—Pioniere—Außenseiter—Gelehrte—*. Dietrich Reimer Verlag, Berlin, 294S.
- Berry, B. J. L. (1961): Basic patterns of economic development. Ginsburg, N. ed.: *Atlas of economic development*. The University of Chicago Press, Chicago, 110-119.
- Bobek, H. (1927): Grundfragen der Stadtgeographie. *Geogr. Anzeiger*, **28**, 213-224. *Wiederabdruck in*: Schöller, P. Hrsg. (1969): *Allgemeine Stadtgeographie*. Wege der Forschung, **181**, Wiss. Buchgesell., Darmstadt, 195-219.
- Bobek, H. (1928): *Innsbruck. Eine Gebirgsstadt, ihr Lebensraum und ihre Erscheinung*. Forsch. z. deutsch. Landes- u. Volkskunde, **25-3**, 152S.
- Bobek, H. (1930): Schlußzeit oder Rückzugsstudien? (Diskussion mit O. Ampferer). *Peterm. Geogr. Mitt.*, **76**, 227-235 (未見)。
- Bobek, H. (1933): *Die Formenentwicklung der Zillelrtaer und Tuxer Alpen*. Forsch. z. deutsch. Landes- u. Volkskunde, 172S (未見)。
- Bobek, H. (1935a): Die jüngere Geschichte der Inntalerasse und der Rückzug der letzten Vergletscherung im Inntal. *Jahrband d. Geol. Bundesanstalt, Wien*, **85**, 135-189 (未見)。
- Bobek, H. (1935b): Eine neue Arbeit zur Stadtgeographie (W. Christaller: Zentrale Orte in Süddeutschland). *Zeitschr. d. Gesell. f. Erdk. z. Berlin*, **26**, 125-130.
- Bobek, H. (1937): Die Rolle der Eiszeit in Nordwestiran. *Zeitschr. f. Gletscherkunde, Berlin*, **25**, 130-183 (未見)。
- Bobek, H. (1938): Über einige funktionelle Stadttypen und ihre Beziehungen zum Lande. *Comptes Rendus Congr. Intern. Géogr. Amsterdam 1938*, **III**, 88-102. *Wiederabdruck in*: Schöller, P. Hrsg. (1969): *Allgemeine Stadtgeographie*. Wege der Forschung, **181**, Wiss. Buchgesell., Darmstadt, 269-288.
- Bobek, H. (1942): Geographie und Raumforschung. Grundsätzliche Betrachtungen. *Raumforsch. u. Raumordn.*, **6**, 336-342.
- Bobek, H. (1948): Stellung und Bedeutung der Sozialgeographie. *Erdkunde*, **2**, 118-125. *Wiederabdruck in*: Storkebaum, W. Hrsg. (1969): *Sozialgeographie*. Wege der Forschung, **59**, Wiss. Buchgesell., Darmstadt, 44-62.
- Bobek, H. (1950): Aufriß einer vergleichenden Sozialgeographie. *Mitt. Geogr. Gesell. Wien*, **91**, 34-45.
- Bobek, H. (1951a): Soziale Raumbildungen am Beispiel des Vorderen Orients. *Deutscher Geographentag München 1948, Tagungsber. u. wiss. Abhand.*, 193-207.
- Bobek, H. (1951b): Die natürlichen Wälder und Gehölzfluren Irans. *Bonner Geogr. Abhand.*, **8**, 62S (未見)。
- Bobek, H. (1951c): Die Verbreitung des Regenfeldbaues in Iran. *Geogr. Studien, Sölch-Festschrift, Wien 1951*, 9-30 (未見)。
- Bobek, H. (1951d): Die räumliche Ordnung der Wirtschaft als Gegenstand geographischer Forschung. *Der österreichische Betriebswirt*, **1**, 25-39.
- Bobek, H. (1952): *Südwestdeutsche Studien*. Forsch. z. deutsch. Landeskunde, **62**, 62S. (未見)。
- Bobek, H. (1953): H. Lautensachs geographischer Formenwandel—ein Weg zur Landschaftssystematik. *Erdkunde*, **7**, 288-293.
- Bobek, H. (1955): Klima und Landschaft Irans in vor- und frühgeschichtlicher Zeit. *Geogr. Jahrb.*

- aus Österreich, 25, 1-42 (未見).
- Bobek, H. (1957): Gedanken über das logische System der Geographie. *Mitt. d. Geogr. Gesell. Wien*, 99, 122-145. *Wiederabdruck in*: Storkebaum, W. Hrsg. (1967): *Zum Gegenstand und zur Methode der Geographie*. Wege der Forschung 67, Wiss. Buchgesell., Darmstadt, 289-329.
- Bobek, H. (1959): Die Hauptstufen der Gesellschafts- und Wirtschaftsentfaltung in geographischer Sicht. *Die Erde*, 90, 259-298. *Wiederabdruck (gekürzt) in*: Wirth, E. Hrsg. (1969): *Wirtschaftsgeographie*. Wege der Forschung, 219, Wiss. Buchgesell., Darmstadt, 441-485. The main stages in socio-economic evolution from a geographical point of view. *In*: Wagner, P. L. and Mikesell, M. W. eds. (1962): *Readings in cultural geography*. Chicago Univ. Press, 218-247.
- Bobek, H. (1961): Zur Problematik eines unterentwickelten Landes alter Kultur: Iran. Nah- und Mittelost-Verein Hamburg, Hrsg. *Orient*, 2, 64-68, 115-124, 146 (未見).
- Bobek, H. (1962a): Über den Einbau der sozialgeographischen Betrachtungsweise in die Kulturgeographie. *Deutscher Geographentag Köln 1961, Tagungsber. u. wiss. Abhand.*, 148-165. *Wiederabdruck in*: Storkebaum, W. Hrsg. (1969): *Sozialgeographie*. Wege der Forschung 59, Wiss. Buchgesell., Darmstadt, 75-103.
- Bobek, H. (1962b): Kann die Sozialgeographie in der Wirtschaftsgeographie aufgehen? *Erdkunde*, 16, 119-126. *Wiederabdruck in*: Storkebaum, W. Hrsg. (1969): *Sozialgeographie*. Wege der Forschung 59, Wiss. Buchgesell., Darmstadt, 121-139.
- Bobek, H. (1962c): Zur Problematik der unterentwickelten Länder. *Mitt. d. Österr. Geogr. Gesell.*, 104, 1-24. *Wiederabdruck in*: Scholz, F. Hrsg. (1985): *Entwicklungsländer. Beiträge der Geographie zur Entwicklungs-Forschung*. Wege der Forschung, 553, Wiss. Buchgesell., Darmstadt, 66-91.
- Bobek, H. (1962d): Iran. Probleme eines unterentwickelten Landes alter Kultur. Puls, W. W. Hrsg.: *Themen zur Geographie und Gemeinschaftskunde*. Moritz Diesterweg, Frankfurt-Berlin-Bonn, 74S (未見).
- Bobek, H. (1966): Aspekte der zentralörtlichen Gliederung Österreichs. *Ber. z. Raumforsch. u. Raumplan.*, 10, 114-129.
- Bobek, H. (1969): Die Theorie der zentralen Orte im Industriezeitalter. *Deutscher Geographentag Bad Godesberg 1967, Tagungsber. u. wiss. Abhand.*, 199-213. *Wiederabdruck in*: Schöller, P. Hrsg. (1972): *Zentralitätsforschung*. Wege der Forschung, 301, Wiss. Buchgesell., Darmstadt, 165-177.
- Bobek, H. (1972): Die Entwicklung der Geographie-Kontinuität oder Umbruch? *Mitt. d. Österr. Geogr. Gesell.*, 114, 3-18. 石井素介訳 (1974): 地理学の発展——連続か断絶か? 地理, 19-1, 11-30.
- Bobek, H. (1974): Zur Konzept des Rentenkapitalismus. *Tijdsch. Econ. Soc. Geogr.*, 65, 73-78.
- Bobek, H. (1975): Österreichs Regionalstruktur im Spiegel des Atlases der Republik Österreich. *Mitt. d. Österr. Geogr. Gesell.*, 117, 117-164.
- Bobek, H. (1976/77): Entstehung und Verbreitung der Hauptflusssysteme Irans—Grundzüge einer sozialgeographischen Theorie. *Mitt. d. Österr. Geogr. Gesell.*, 118, 274-304; 119, 34-51 (未見).
- Bobek, H. (1983): Some comments toward a better understanding of my scholarly life-path. Buttner, A. ed.: *The practice of geography*. Longman, London and New York, 167-185.
- Bobek, H. (1989): Einige Bemerkungen zum besseren Verständnis meines wissenschaftlichen Lebensweges. *Geogr. Jahresber. aus Österreich*, 48, 7-40.
- Bobek, H. u. Fesl, M. (1978): *Das System der zentralen Orte Österreichs. Eine empirische Untersuchung*. Hermann Boehlaus Nachf., 310S.
- Bobek, H. u. Lichtenberger, E. (1966): *Wien. Bauliche Gestalt und Entwicklung seit Mitte des 19. Jahrhunderts*. Schriften der Kommission für Raumforschung der Österr. Akademie der Wissenschaften. hg. v. H. Bobek, Bd. 1, H. Boehlaus Nachf., Graz-Köln, 394S (未見).
- Bobek, H. u. Schmithüsen, J. (1949): Die Landschaft im logischen System der Geographie. *Erdkunde*, 3, 112-120. *Wiederabdruck in*: Storkebaum, W. Hrsg. (1967): *Zum Gegenstand und zur Methode der Geographie*. Wege der Forschung, 67, Wiss. Buchgesell., Darmstadt, 257-276.
- Buttimer, A. ed. (1983): *The practice of geography*. Longman, London and New York, 298p.
- Christaller, W. (1933): *Die zentralen Orte in Süd-deutschland*. Gustav Fischer, Jena, 331S.
- Dörries, H. (1930): Der gegenwärtige Stand der Stadtgeographie. *Peterm. Geogr. Mitt. Erg.*, 209, 310-325. *Wiederabdruck in*: Schöller, P. Hrsg. (1969): *Allgemeine Stadtgeographie*. Wege der Forschung, 181, Wiss. Buchgesell., Darmstadt, 3-37.
- Fachverband Geowissenschaften (1970): Bestandsaufnahme zur Situation der deutschen Schul- und Hochschulgeographie. *Deutscher Geographentag Kiel 1969, Tagungsber. u. wiss. Abhand.*, 191-232.
- Fesl, M. u. Bobek, H. (1983): *Zentrale Orte Österreichs II. Ergänzungen zur Unteren Stufe; Neuerhebung aller Zentralen Orte Österreichs*

- 1980/81 und deren Dynamik in den letzten zwei Dezennien. Beiträge zur Regionalforschung, Bd. 4, Verlag der Österr. Akademie der Wissenschaften, 110S.
- Fesl, M. u. Bobek, H. (1986): *Karten zur Regionalstruktur Österreichs. Ein Nachtrag zum Atlas der Republik Österreichs*. Verlag der Österr. Akademie der Wissenschaften (=Beitr. z. Regionalforschung, 7), 4 Ktn. 1:1 Mill. mit Nebenktn. u. Diagr. (未見).
- Galpin, C. J. (1915): *Social anatomy of an agricultural community*. Univ. of Washington, Agricultural Experiment Station Research Bull., 34, 34p.
- Geisler, W. (1932): Zur Methodik der Stadtgeographie. *Peterm. Geogr. Mitt., Erg.*, 214, 39-47.
- Gilbert, A. (1982): Introduction. Gilbert, A., Har-roy, J. E. and Ramirez, R. eds.: *Urbanization in contemporary Latin America*. John Wiley & Sons, 1-18.
- Ginsburg, N. ed. (1961): *Atlas of economic development*. The University of Chicago Press, Chicago, 119p.
- Gradmann, R. (1916): Schwäbische Städte. Vortrag in der Gesellschaft für Erdkunde zu Berlin am 8. April 1916. *Zeitschr. d. Gesell. f. Erdk. z. Berlin*, 7, 425-457.
- Hartke, W. (1963): Der wissenschaftliche Lebensweg von Professor Dr. Hans Bobek. *Mitt. d. Österr. Geogr. Gesell.*, 105, 5-22.
- Hettner, A. (1895): Die Lage der menschlichen Ansiedlungen. *Geogr. Zeitschr.*, 1, 361-375.
- Hoselitz, B. (1955): Generative and parasitic cities. *Economic Development and Cultural Change*, 3, 278-294.
- Johnston, R. J. (1979): *Geography and geographers: Anglo-American human geography since 1945*. Edward Arnold, London, 232p.
- Johnston, R. J. ed. (1981): *The dictionary of human geography*. Basil Blackwell, Oxford, 411p.
- 木内信蔵 (1968): 地域概論——その理論と応用——. 東京大学出版会, 370p.
- Kluczka, G. (1970): *Zentrale Orte und zentralörtliche Bereiche mittlerer und höherer Stufe in der Bundesrepublik Deutschland*. Forsch. z. deut sch Landeskn., 194, 46S.
- Kohl, J. G. (1841): *Der Verkehr und Ansiedlungen der Menschen in ihrer Abhängigkeit von der Erdoberfläche*. Dresden-Leipzig. 淡川康一訳(1966): コールの交通聚落論. 産業立地論の源流. 雄渾社, 390p.
- Kolb, J. G. (1923): *Service relations of town and country*. Univ. of Washington, Agricultural Experiment Station, Research Bull., 58, 78p.
- Kretschmer, I. (1991): Zum Stand der Atlaskartographie in Österreich. *Mitt. d. Österr. Geogr. Gesell.*, 133, 201-231.
- Lautensach, H. (1952): *Der geographische Formenwandel. Studien zur Landschaftssystematik*. Colloquium Geographicum, 3, 199S.
- Lichtenberger, E. (1990): Hans Bobek—ein Nachruf. *Mitt. d. Österr. Geogr. Gesell.*, 132 (Jahresband), 238-248.
- Löffler, H. (1991): Geschichte der Geographie. Auf Iran-Reise mit Hans Bobek im Jahre 1956. *Mitt. d. Österr. Geogr. Gesell.*, 133, 175-190.
- 森川 洋 (1972): 西ドイツ・オーストリアにおける地理学の研究動向について. 人文地理, 24, 643-670.
- 森川 洋 (1974): 中心地研究. 大明堂, 457p.
- 森川 洋 (1980): 書評. Bobek, H. u. Fesl, M.: *Das System der zentralen Orte Österreichs. Eine empirische Untersuchung*. Hermann Boehlaus Nachf., 1978. 地理学評論, 53, 543-546.
- 森川 洋 (1991): 中央ヨーロッパにおける都市システムの発展. 科学研究費補助金「重点領域研究」「イスラムの都市性研究報告(研究報告編, 98)」, 1-21.
- 西川 治 (1970): 文化地理学の基礎. 木内信蔵編: 文化地理学, 朝倉地理学講座 8. 朝倉書店, 12-25.
- 西川 治 (1985): 人文地理学入門——思想史的考察——. 東京大学出版会, 244p.
- Otremba, E. (1951/52): Der Bauplan der Kulturlandschaft. *Die Erde*, 3, 233-245. *Wiederabdruck in: Störkebaum, W. Hrsg. (1967): Zum Gegenstand und zur Methode der Geographie. Wege der Forschung*, 67, Wiss. Buchgesell., Darmstadt, 515-533 (未見).
- Otremba, E. (1962): Die Gestaltungskraft der Gruppe und der Persönlichkeit in der Kulturlandschaft. *Deutscher Geographentag Köln 1961, Tagungsber. u. wiss. Abhand.*, 166-176. *Wiederabdruck in: Störkebaum, W. Hrsg. (1969): Sozialgeographie. Wege der Forschung*, 59, Wiss. Buchgesell., Darmstadt, 104-120.
- Penck, A. u. Brückner, E. (1903/09): *Die Alpen im Eiszeitalter*. 3Bde, Leipzig (未見).
- Reilly, W. J. (1929): *Methods for the study of retail relationships*. Univ. of Texas, Bureau of Business Research, Research Monograph, 4 (Univ. of Texas Bull., No. 2994), 50p.
- Rostow, W. W. (1960): *The stages of economic growth, A non-communist manifesto*. The University Press, Cambridge, 179 p. 木村健康・久保まち子・村上泰亮共訳 (1961): 経済成長の諸段階——一つの非共産主義宣言——. ダイヤモンド社, 234p.
- Ruppert, K. u. Schaffer, F. (1970): Sozialgeographie. In: *Handwörterbuch der Raumforschung und Raumordnung*. Gebrüder Jänecke Verlag, Hannover, Sp. 978-985.
- 齋藤光格 (1982): 社会地理学試論. 古今書院, 287p.
- Sauer, C. O. (1952): *Agricultural origins and dis-*

- persals*. The American Geogr. Soc., Ser. 2, New York, 110p. 竹内常行・斎藤晃吉共訳 (1960): 農業の起源. 古今書院, 164p.
- Schlüter, O. (1899): Bemerkungen zur Siedlungsgeographie. *Geogr. Zeitschr.*, **5**, 65-84.
- Schöller, P. (1960): Städte als Mobilitätszentren westdeutscher Landschaften. *Deutscher Geographentag Berlin 1959, Tagungsber. u. wiss. Abhand.*, 158-166.
- Schwarz, W. (1983): Vorwort. In: *Aktuelle Beiträge zur angewandten Humangeographie. Festschrift zum 80. Geburtstag von Hans Bobek*. Schriftenreihe des Österreichischen Instituts für Raumplanung, Reihe B, Bd. 7, 5-7.
- Stiglbauer, K. (1983): Hans Bobek und die deutsche und österreichische Landeskunde. Aus Anlaß des 80. Geburtstages am 17. Mai 1983. *Ber. z. deutsch. Landesk.*, **57**, 5-11.
- Stiglbauer, K. (1984): System, Theorie und Methoden der Geographie. Hans Bobek zum 80. Geburtstag. *Mitt. d. Österr. Geogr. Gesell.*, **126**, 7-11.
- 手塚 章 (1987): ドイツ地理学におけるラントシャフト論の展開. 人文地理学研究, **XI**, 139-164.
- Vidal de la Blache, P. (1911): Les genre de vie dans la géographie humaine. *Ann. d. Géogr.*, **20**, 193-212, 289-304.
- Weulersse, J. (1938): La primauté des cités dans l'économie Syrienne. *Compte Rendus Congr. Intern. Géogr. Amsterdam 1938, t. II, Section 3 a* (未見).
- Whitehand, J. W. R. (1985): Contributors to the recent development and influence of human geography: what citation analysis suggests. *Trans. Inst. Brit. Geogr.*, **NS.**, **10**, 222-234.
- Wirth, E. (1973): Die Beziehungen der orientalisches-islamischen Stadt zum umgebenden Lande. Ein Beitrag zur Theorie des Rentenkapitalismus. In: *Geographie heute. Einheit um Vielfalt; Ernst Plewe zu seinem 65. Geburtstag von seinen Freunden und Schülern gewidmet*. Wiesbaden, 323-333.
- 山本健児 (1981): ある社会地理学の軌跡——ハルトケ学派の場合. 人文地理, **33**, 334-351.
(1992年4月24日受付, 1992年5月11日受理)